

# JICA's World

JULY 2012 No.46

7

特集 スポーツ

# 未来へのスタート



## アフリカの野球少年

from Burkina Faso ブルキナファソ



「ボン・バロン (良い球だ)!!」「セ・バ・サ (そうじゃない)!!」

土ぼこりの舞う中、グラウンドに威勢のいいフランス語が響く。

西アフリカの小国・ブルキナファソでは、野球はまだ知名度の低いスポーツ。フランスの植民地であった影響からか、アメリカが発祥の地である野球はなじみが薄い。それに加えて、ボールやバット、グローブなどの用具が必要で、初心者にはルールも複雑だ。

しかし、それでも野球を愛する人たちはいる。ユニフォームがバラバラでも、シューズがなくても、白球を追うまなざしはいつも真剣。お世辞にもうまいとは言えないけれど、青年海外協力隊員の指導を受けながら、毎日懸命に練習する姿は輝いている。

アフリカの大地で、今日も球児たちの声がこだましている。



撮影：本間裕人 (ブルキナファソ/青年海外協力隊)

## あなたの作品募集中!

[my photo]では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や開発途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

**応募条件** ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上(目安)で撮影されていること、また画像の記録形式はJPEGを推奨します。

**応募方法** お名前、連絡先(電話番号とEmail)、エピソード(300~350字)、記名の可否をご記入の上、写真とともに応募先アドレスまでEmailでお送りください。  
\*応募作品は本コーナーのほかに、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。ご記入いただいた個人情報はこれら以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。



## Contents

02 my photo アフリカの野球少年 ブルキナファソ

04 特集 スポーツ

## 未来へのスタート

特別インタビュー 山下泰裕さん

子どもたちを変える力 エチオピア

ナショナルチームの育成で国民の結束を高める ネパール

目指せ! 未来のパラリンピック ジャマイカ

スポーツを通じて“つながる”



18 PLAYERS マラソンを出発点に“輪”を広げる NPO法人ハート・オブ・ゴールド

20 特別レポート

## 有森裕子さん 障害を乗り越えて走る 死海マラソン

in ヨルダン



22 JICA STAFF 市川 裕一 JICAエチオピア事務所

23 JICA UPDATE

24 JICA Volunteer Story 米本 竜馬さん 青年海外協力隊OB/タイ/理学療法士

26 世界とつながる教室 横浜から世界へ羽ばたく 横浜市立平楽中学校

28 ココシリ 「ここが知りたい」いろんなトピックを分かりやすく解説!

30 地球ギャラリー

ミャンマー

## 最後のフロンティア



37 イチオシ! 本・映画・イベント

39 MONO語り 丘の向こうで生まれたビーズのアクセサリー

40 私のなんとかしなきゃ! 吉元 由美 作詞家・作家



JICAのビジョン

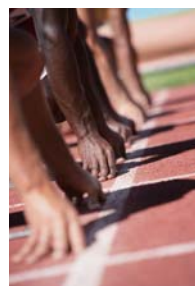
すべての人々が恩恵を受ける、  
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙

Photo:OJO Images/Getty Images

健全な社会の形成、心身の発達に  
必要不可欠なスポーツ。途上国の  
人々が明るい未来への“スタート”を  
切るためにも有効な手段だ







【上】世界各地を飛び回り、柔道の普及を進めている山下さん。「相手と組んだ時、国境を超えて心と心がつながるような気がします」

【下】2007年12月から9カ月間、日本で研修を受けた南アフリカのジャック・ヴァン・ザイル選手(左)は、ロンドンオリンピック男子柔道73kg級で出場予定だ

#### PROFILE

#### YAMASHITA Yasuhiro

1957年熊本県出身。84年ロサンゼルスオリンピック男子柔道無差別級で金メダルを獲得し、国民栄誉賞を受賞。現役引退後は全日本柔道男子などの指導者として活躍。2003年国際柔道連盟理事に就任。現在は東海大学理事・副学長・体育学部長を務める。「認定NPO法人柔道教育ソリダリティー」を立ち上げ、柔道を通じた国際協力にも取り組む。

☆認定NPO法人柔道教育ソリダリティーの活動はこちら→[www.npo-jks.jp/](http://www.npo-jks.jp/)

今から28年前、ロサンゼルスオリンピックに出場した時、2回戦で右足をけがしてしまいました。柔道一筋で突き進んできた人生。表彰台の頂点を目指してきた努力、周りの人の応援を無駄にしてなるものかと、あらゆる「技」を駆使して決勝まで進むことができました。金メダルを手にした時はまさに感無量。その気持ちは、とても言葉では表現できません。

柔道では対戦相手は敵ではありません。相手がいるからこそ、自分を磨き高めることができる。練習であれ試合であれ、そこには常に、相手に対する尊敬がなければなりません。その気持ちを表現するのが、試合前後の「礼」。それはまさに、私たちが誇るべき「日本人らしさ」が出ている部分でもあります。

# 山下泰裕

## 「柔の道は人づくり」

現役時代、その圧倒的な強さから「史上最強の柔道家」と称された山下泰裕さん。ロサンゼルスオリンピックでは全試合一本勝ちで金メダルを獲得。その強さを世界中に知らしめた。引退後は指導者として国内外で後進の育成に従事し、柔道の普及に努めてきた彼が追求するのは「自他共栄」の精神。スポーツだからこそ実現できることは――。

引退後は柔道の普及のため、国内外で後進の指導に当たっています。柔道について知ってもらうことも私の役割。国際柔道連盟の理事に就任してから世界のさまざまな状況を知り、貧しさ故に可能性を生かされていらない人たちが、他の選手と平等に畳の上で立てるような環境づくりをしたいと思うようになりました。そうして2006年に立ち上げたのが「柔道教育ソリダリティー」。私が代表理事を務めています。柔道界や大学関係者を巻き込みながら、開発途上国

の指導者、選手の人材育成、柔道着や畳の寄付などに取り組んでいます。このNPOの活動を通じて、アフガニスタン、ロシア、イスラエル、パレスチナ、中国など、さまざまな国の選手、指導者とかかわってきました。現地に行くこともあれば、彼らを日本で受け入れて研修することもあります。柔道は日本発祥のスポーツですが、国によってスタイルが違う。私たちも勉強になることばかりです。そしてスポーツをしている時は、みんな生き生きとしている。勝った時の笑顔、負けた時の悔しい顔。自身と真つすぐ向き合える空間がそこにはあると感じます。こうした一つ一つの出会いが、つながって、彼らが日本との「懸け橋」となってくれば、こんなにうれしいことはありません。

ルールや規律を守ること、仲間と協力し合うこと、努力の先にある感動。私は人生において大切なことの多くを柔道を通じて学んできました。私のことを「史上最強の柔道家」という人もいます。しかし、最強と最高は違います。私が本当に「最高」であるかどうかは、これからの私の生き方にかかっている。柔道で体得したものを自身の人生で生かし、より良い社会づくりのために貢献していく。これこそが、私の柔道人生の究極の目標です。柔道一筋の人生、これからも私の挑戦は続いていきます。



特別インタビュー

photo by Yuki Asada



# 未来への スタート

2012年はオリンピックイヤー。開催地のイギリスだけでなく、世界中の人々が4年に一度のスポーツの祭典を待ちわびている。いつでもどこでも、多くの人を引き付ける魅力のあるスポーツ。国際協力の世界でも、開発途上国の国づくり、人づくりに有効なアプローチとして注目が高まっている。スポーツに秘められた未知なる可能性。オリンピックを機に、あらためて考えてみよう。

編集協力：黒田次郎・近畿大学産業理工学部講師（青年海外協力隊OB／コスタリカ／野球）

**みんなが参加できる  
スポーツ**  
梅雨が明けるといよいよ夏も本番。まぶしくらいに照りつける太陽、うだるような暑さが待っているが、こんな時だからこそ、スポーツに汗を流すのも気持ちいい季節になってきた。

そして7月末には、4年に一度のスポーツの祭典、ロンドンオリンピックが開幕する。水泳、柔道、マラソン、体操……学校でも職場でも、話題はオリンピック。学校でもスポーツをする人もしない人も、体を動かすことが好きな人も嫌いな人も、この時はやはり皆、国の代表の活躍にきぎ付けになるはず。そう、スポーツ

には、人をひき付ける不思議な魅力があるのだ。

「オリンピックやワールドカップなど、スポーツの国際大会での競争は、武力闘争ではない。スポーツ外交という言葉があります」と、近畿大学産業理工学部の黒田次郎先生は話す。そして、プロ

## ブルキナファソで柔道の発展を目指す

日本発祥のスポーツといえばやはり「武道」。中でも柔道は、男女ともにオリンピック競技になっているほど世界でも知名度の高いスポーツだ。そしてその人気は、海を越えて、アフリカ大陸にまで広がっている。その一つが西アフリカのブルキナファソ。国内に柔道連盟が設立されてからすでに半世紀以上。現在は25のクラブチームが加盟しており、競技人口もアフリカ大陸の中で群を抜いている。しかし実際、競技に必要な不可欠な量や柔道着などが不足しており、練習環境でさえ十分に整っていない状況。そこで日本は無償資金協力を通じて、2011年に量や柔道着を供与。両国の友好の証しともいえるこれらの引き渡しを記念し「柔道日本大使杯」も開催された。「これで満足に練習ができます」と選手たち。日本の支援で贈られた柔道着に身をまとい、ブルキナファソから金メダリストが誕生する日もそう遠くないかもしれない。



【上】 杉浦勉・在ブルキナファソ特命全権大使から柔道着の引き渡しが行われた  
【下】 オリンピックを目指し練習に励む子どもたち



便利になるにつれて、体を動かす機会が減っているこの時代。定期的に意識して体を動かすことで、健康・体力の維持にもつながる。また「心理的」な側面で言えば、スポーツは規律や助け合いなど精神を鍛える効果がある。フェアプレイやスポーツマンシップを身に付けることは、人間力の向上にもつながるのだ。

## 開発途上国の人々に 豊かな生活を

私たち日本人にとっては、小学校の時から当たり前のように「体育」の授業がある。テレビをつければスポーツ観戦ができ、余暇の時間にも公共の施設などで運動するチャンスはいくらでもある。

私たちが、意識せずとも、スポーツを通してさまざまな恩恵を受けている。まず一つは「身体的」な側面。日常生活が

しかし、開発途上国では、教育、保健、環境などさまざまな課題が山積する中で、スポーツの位置付けは決して高いとは言えない。「先進国以外では、スポーツは、生活に余裕がある人がするもの」という意識が強い」と黒田先生は話す。

しかしこの10数年、国際社会では「スポーツと開発」の効果が注目され始めている。2003年に「開発と平和のためのスポーツ国連タスクフォース」が発足。05年は国連により「スポーツと体育の国際年」として定められ、教育、健康、開発、平和を促進する手段としてスポーツと体育の役割への理解が促された。スポーツをすることで健康が維持できれば、途上国の人々の医療費の削減にもつながる。ミレニアム開発目標(MDGs)に貢献するものとしても期待が高まっている。

JICAは途上国におけるスポーツの重要性にいち早く着目し、ボランティア派遣などを通じて、情操教育としての体育、競技としてのスポーツの普及に取り組んできた。「コミュニティレベルのクラブ活動からナショナルチームの指導まで支援の範囲は幅広い」と黒田先生。現在は「情操教育を通じた青少年の育成」(8ページに関連記事)、「ナショナルチームへの指導」(12ページに関連記事)、「健康増進、障害者スポーツへの寄与」(14ページに関連記事)を三本柱に、企業やNGOなどの団体なども巻き込みながら、スポーツ分野の協力を強化している。未知なる可能性を持つスポーツ。それは途上国の人々の、未来へのスタートへの大きな一歩になるかもしれない。



JICAオフィシャルサポーターは世界各国を飛び回り、スポーツを通じた国際協力にも取り組む



## JICAオフィシャルサポーターもスポーツで国際協力!

JICAオフィシャルサポーターを務めるのは、北澤豪さん、高橋尚子さん、クルム伊達公子さんの三人。誰もが知る日本の名だたるスポーツ選手たちだ。彼らは年に数回、開発途上国を訪問し、JICAのプロジェクトや青年海外協力隊の活動などを視察。帰国後は国際協力関連のイベントや自身の講演会などの場で、「途上国の現場で起こっていること」を私たちに分かりやすく伝えてくれている。

そして途上国に滞在中は、彼らの強みである「スポーツ」を通じた交流も積極的に行っている。彼らと体を動かす子どもたちの笑顔は、何もものにも代えがたい。「スポーツに携わる者として国際協力を続けていきたい」と語るサポーターの3人。スポーツに国境はない。途上国の子どもたちと汗を流している姿を見ていると、まさにそのことが実感できる。





ベースを保って走ることを指導する鈴木さん。「走る技術だけではなく、先を考える力も養ってもらえたら」と話す

陸上部を立ち上げた理由について、鈴木さんは「体育の授業だけでは教えきれないことがたくさんあった」と話す。エチオピアの高校では体育が週1回で、しかも教室での座学が多い。さらに、この学校では1クラスの生徒数が60人という多さだ。「授業時間は40分しかないのに授業と授業の間に休み時間がなく、数少ない実技の授

業の前は着替えに時間がとられ、結局、残りは20分。体育を通して僕が伝えたいことを一人一人に分かってもらうには時間が足りない」と鈴木さんは話す。そこで、クラス対抗の球技大会を企画したり、視覚的に分かりやすい教材を作成するなど工夫に加え、授業外もスポーツを教えられる機会を作ろうと一念発起し、陸上部が誕生したのだ。

「順位にこだわる部員が多いのですが、大切なのは自分のタイム。目標を立て、それに向かってどう努力すべきか考えることを学んでほしい」と鈴木さん。創設時から参加している部員、アブラハム・ゲタハーンさん（18歳）は、「陸上部では、時間を守る。練習を休むときは連絡する。あいさつをする」という社会生活のルールを徹底して教え込まれます。鈴木先生の指導は厳しいですが、それは僕たちのことを考えてくれ



陸上部創設時からのメンバー、高校生のアブラハムさん。陸上部に友人を誘い、輪を広げてくれた

身が長年行ってきた陸上競技を情報教育に生かそうと、陸上部を立ち上げた青年海外協力隊員がいる。アデイスアベバ中心部にあるハイヤー23高校で、体育隊員として活動中の鈴木聡志さんだ。

「二人一人がタイムを気にする

日本からおよそ1万キロ。5月下旬、日本を出て20時間後によくやく東アフリカのエチオピアに降り立った。首都アデイスアベバは標高2400メートルの高地にあるため比較的涼しく、この日の最高気温は25度。それでも「1年で一番暑いときに来たね」と現地の人に声をかけられた。日中は暑いですが、朝夕はぐんと気温が下がって肌寒い。

一般的に標高が高い場所では酸素が薄いため、より多くの酸素を体内に取り入らなくては心肺機能が自然に高まる。多くのスポーツ選手が高地トレーニングを行う理由だ。だからこそエチオピアはマラソンや5000メートル競走など肺活量が求められる長距離陸上競技に強い。東京オリンピック男子マラソン金メダリストのアベベ・ビキラや、世界陸上4連覇など圧倒的な強さから「皇帝」と称されたハイレ・ゲブレシラシエなど、これまで多くの有名選手がこの国から輩出されており、国際大会でのメダル獲得数も多い。

しかし実際、練習する場所や指導者が不足しているため、一般市民や学生にとっては、関心はあっても参加することはほとんどないという。しかし、陸上競技を通して学べることは多い。そこで、自

努力の大切さに気付く



エチオピア  
from ETHIOPIA

## 子どもたちを変える力

チームワーク、社会性、規律、思いやり—。スポーツを通じて、子どもたちが学ぶべきことはたくさんある。それを伝えようと、学校と地域を巻き込みながら奮闘するエチオピアの青年海外協力隊員取材した。



協力隊員の鈴木さんの指導の下、練習に励むハイヤー23高校陸上部の部員たち





高校生コーチのタンサイさんにアドバイスを石部さん。こつこつと努力を続けるタンサイさんへの信頼は厚い

唯一残ったチームのコーチを務めてきた高校生、タンサイ・マラクさんが指導する練習を見学に行くと、メンバーの小学生があいさつにきてくれた。「サラム（こんにはは）！」。石部さんの10のルールが根付いている証だ。タンサイさんの指示で準備運動、シユートなどの基礎練習を行ってから、試合形式の練習へ。終了後には今日の練習を踏まえ

と課題を話す稲見さん。「生徒はボールを適当に投げて、ゴールに入れたいと思ってる。でも正しいフォームを身に付けて、シユートが確実に入るようになったら、もっと楽しいと思えますよね」。そこで、稲見さんは同じ地域のギオン高校で活動する体育隊員の浅野翔太さんと協力し、学校対抗の球技大会を企画。また、用具がなくても効率的に授業を行える方法を、セミナーを通して現地の教員に伝えるなどの活動に取り組んでいる。

「子どもたちにずっとサッカーを教えたい？」  
石部さんがそう問いかけると、タンサイさんは「もちろん、僕がドルベテにいる限り！」と明るく答えてくれた。すでにチームの中から3人の小学生コーチが生まれ、さらに年下の子どもたちに教え始めた。また、石部さんの指導を受けた高校生3人もタンサイさんに刺激を受け、再びコーチとして戻ってきた。石部さんの教えを受け継ぐ、頼もしい指導者たちが着実に育っているのだ。

子どもたちは大好きなサッカーを通じて次第にルールを守ることが習慣になっていた

決めた10のルール。時間を守る、あいさつをする、相手を尊敬する、サッカー以外の勉強もきちんとやる……。どれも一見サッカーとは関係ないように思えるが、実は上達のカギを握っている。

指導するのは石部さんではなく、クラブに所属する高校生。このプロジェクトは、石部さんが教えたことを高校生が受け継ぎ、それを次の世代に伝えていくという仕組みなのだ。

た改善点などを指摘する。こうして指導できるのも、高校のサッカークラブで石部さんの厳しい練習を経験したからこそ。途中で辞めてしまう生徒も多かった中、タンサイさんは、サッカーがうまくならないという強い気持ちで参加し続けてきた。「練習を重ねるうち、本當にうまくなった。自分で練習メニューを考えて子どもたちに教えることで、どんどん成長しています」と石部さんはうれしそうに話す。タンサイさんは、「サッカーの練習に行くから、この時間に勉強、この時間に家の手伝いと効率よく行動できるようにになりました」と話す。

「子どもたちにずっとサッカーを教えたい？」  
石部さんがそう問いかけると、タンサイさんは「もちろん、僕がドルベテにいる限り！」と明るく答えてくれた。すでにチームの中から3人の小学生コーチが生まれ、さらに年下の子どもたちに教え始めた。また、石部さんの指導を受けた高校生3人もタンサイさんに刺激を受け、再びコーチとして戻ってきた。石部さんの教えを受け継ぐ、頼もしい指導者たちが着実に育っているのだ。



体育の授業でバスケットボールのパスを実演する森本さん。「最初は真っすぐに並べなかった生徒が次第に並べるように。小さな変化でもうれしい」



稲見さんが生徒にバスケットボールのシュートフォームを教える。実技の授業を楽しんでくれる生徒も多い

と課題を話す稲見さん。「生徒はボールを適当に投げて、ゴールに入れたいと思ってる。でも正しいフォームを身に付けて、シユートが確実に入るようになったら、もっと楽しいと思えますよね」。そこで、稲見さんは同じ地域のギオン高校で活動する体育隊員の浅野翔太さんと協力し、学校対抗の球技大会を企画。また、用具がなくても効率的に授業を行える方法を、セミナーを通して現地の教員に伝えるなどの活動に取り組んでいる。

「子どもたちにずっとサッカーを教えたい？」  
石部さんがそう問いかけると、タンサイさんは「もちろん、僕がドルベテにいる限り！」と明るく答えてくれた。すでにチームの中から3人の小学生コーチが生まれ、さらに年下の子どもたちに教え始めた。また、石部さんの指導を受けた高校生3人もタンサイさんに刺激を受け、再びコーチとして戻ってきた。石部さんの教えを受け継ぐ、頼もしい指導者たちが着実に育っているのだ。

「これまで現地の教員は、バスケットボールで言えばパスやシュートしか教えていませんでした」

「子どもたちにずっとサッカーを教えたい？」  
石部さんがそう問いかけると、タンサイさんは「もちろん、僕がドルベテにいる限り！」と明るく答えてくれた。すでにチームの中から3人の小学生コーチが生まれ、さらに年下の子どもたちに教え始めた。また、石部さんの指導を受けた高校生3人もタンサイさんに刺激を受け、再びコーチとして戻ってきた。石部さんの教えを受け継ぐ、頼もしい指導者たちが着実に育っているのだ。

「子どもたちにずっとサッカーを教えたい？」  
石部さんがそう問いかけると、タンサイさんは「もちろん、僕がドルベテにいる限り！」と明るく答えてくれた。すでにチームの中から3人の小学生コーチが生まれ、さらに年下の子どもたちに教え始めた。また、石部さんの指導を受けた高校生3人もタンサイさんに刺激を受け、再びコーチとして戻ってきた。石部さんの教えを受け継ぐ、頼もしい指導者たちが着実に育っているのだ。

**サッカーを通して受け継がれていくルール**

メラウイ村からさらに車で30分、未舗装の道からドルベテ村に入ると、土壁の家々が並び、はだしの子どもたちが遊んでいる。



石部さんが活動するドルベテ村。クラブで使える運動場以外、サッカーができる広い場所は少ない



という声も多い。ナショナルチームへの応援を通して自国への愛着を高め、国民を一つにする力をスポーツは秘めている。

**日本から来た頼れる空手のセンセイ**

「礼！」

白い道着に身を包んだ選手たちが正座で礼をし、空手の練習が始まる。

「センセイ！試合で勝つにはどうしたらいいですか？」

「センセイ！『突き』の技術を教えてください」

「センセイ」と呼ばれ、若い選手たちに稽古をつけているのは、シニア海外ボランティアの近藤如巨さんだ。

ここはヒマラヤ山脈を臨む国ネパール。政府はスポーツを通じて、国民の愛国心の向上と健康増進を図るべく「Vision 2020」を掲げ、特に競技人口の多い空手に力を入れている。しかし、ナショナルチームに選抜された選手が国際大会で活躍するには、まだまだレベルアップが必要だ。

そこで、09年から2年間、近藤さんが初代シニア海外ボランティアとしてネパールスポーツ評議会に派遣され、ナショナルチームの監督として指導に当たることになった。近藤さんは日本約

40年間、会社員をしながら国内の道場で空手の指導を続け、ヨーロッパなど海外でも指導してきた。定年後は「自分が自信を持てる技術を途上国に伝えたい」との思いから、05年にシニア海外ボランティアとしてスリランカの空手ナショナルチームの監督に。その経験をもとに生かしたいと、ネパールに赴任した。

**「急がば回れ」強くなるには基礎から**

「選手もコーチも、空手の基本である正しい姿勢での突き、蹴りといった鍛錬を積んでおらず、みんな『我流』でした。それでは本当に強い相手には勝てない」と近藤さんは話す。目標は、インド、アフガニスタン、パキスタンなど南アジア地域の8カ国が参加する「南アジア大会」でのメダル獲得。近藤さんは強化練習を開始した。

彼が心掛けたのは、基礎の大切さを示すこと。「私は彼らより3倍も歳をとっているし、力も弱いのになぜ強いか。それは基礎をきちんと身に付けているから。突き一つとっても、私と選手ではまったく違います。腰を回転させてスピードをつけつつ、全体重を拳に乗せるものですが、彼らはそれができていない。対戦相手への威力がまったく違う

ことを、実演して学んでもらいました」と近藤さんは話す。

こうした日々の積み重ねこそ、強くなる近道。社会的地位、性別、民族などは関係ない。努力した者がその分だけ強くなるのだ。近藤さんの指導を受け、「武道の奥深さを知り、難しさを乗り越える楽しさも少しずつ分かってきました」と、バネンドラ・オジヤ選手は話す。練習を重ねた結果、その年の南アジア大会では金メダルを3個、銀メダルを2個、銅メダルを1個獲得するという快挙に、国中が歓喜に沸いた。

「国の代表選手を教えることは、指導者冥利に尽きます。自分の持てる技術や知識を伝えることで強くなってほしい」と近藤さん。現在は、再びシニア海外ボランティアとしてラオスのナショナルチームの監督を務めている。ここでも基礎を積み重ねる大切さを伝え、選手の技術向上を目指して活動している。

一国の代表として国際的な舞台で戦うナショナルチームのレベルアップを後押しする。こうしたJICAの支援を通じて、スポーツをきっかけに母国への愛着が広がれば、国民が一つになれる。それは、国が発展する原動力へとつながっていくはずだ。

現在、近藤さんが監督を務めるラオスのナショナルチーム。徹底して基礎から指導する



ネパールの選手に稽古をつける近藤さん。「どの選手もやる気がある。この年寄りに負けるなど叱咤激励していました」



## ナショナルチームの育成で国民の結束を高める

スポーツの国際大会に出場する選手は、国民の期待を一身に背負う国の代表。JICAは開発途上国のナショナルチームにJICAボランティアを派遣し、スポーツ分野の人づくりに取り組んでいる。



### スポーツを通して国民が一丸となる

オリンピック、ワールドカップ、世界選手権。世界に名だたるスポーツの国際大会には、プロのチームや実業団などに所属する選手が「国の代表」として参加する。

この「国の代表」には、特別な思いを抱く人が多いのではないだろうか。例えば2011年のFIFA女子ワールドカップでの「なでしこジャパン」。普段はサッカー観戦をしない人も応援の輪に加わり、優勝を勝ち取った彼女たちの姿に力をももらった

スリランカの代表選手たちと。「みんな体が大きく、ポテンシャルは高い」と近藤さん



09年から1年半監督を務めたスリランカのナショナルチーム。教え子たちが南アジア大会でメダルを獲得





みんなで仲良くバタ足の練習



**障害を持つ人々に  
体を動かす機会を**

「ピーー！」  
甲高い笛の音がプールサイドに  
鳴り響く。

「今日は息継ぎの練習をします。  
でも、その前に準備運動ね。イチ、  
ニ、サン、シー！」

青年海外協力隊の青木奈美さん  
の指導の下、子どもたちが整列し  
てストレッチを始める。早くプー  
ルに入りたいといわんばかりに、  
どの子も満面の笑みだ。

「みんな水泳の授業が大好きな  
んです。廊下ですれ違っていると決まっ  
て、『次の授業は水曜日だよ』  
と話しかけてくるんですよ」。派  
遣されてから1年半、すっかりこ  
の学校の「一員」となった青木さ  
んはうれしそうに話す。ここは、  
カリブ海に浮かぶ国ジャマイカ。  
気候は常夏。何か問題が起きても  
「No problem」。子どもからお年  
寄りまで、のんびりおらかな人

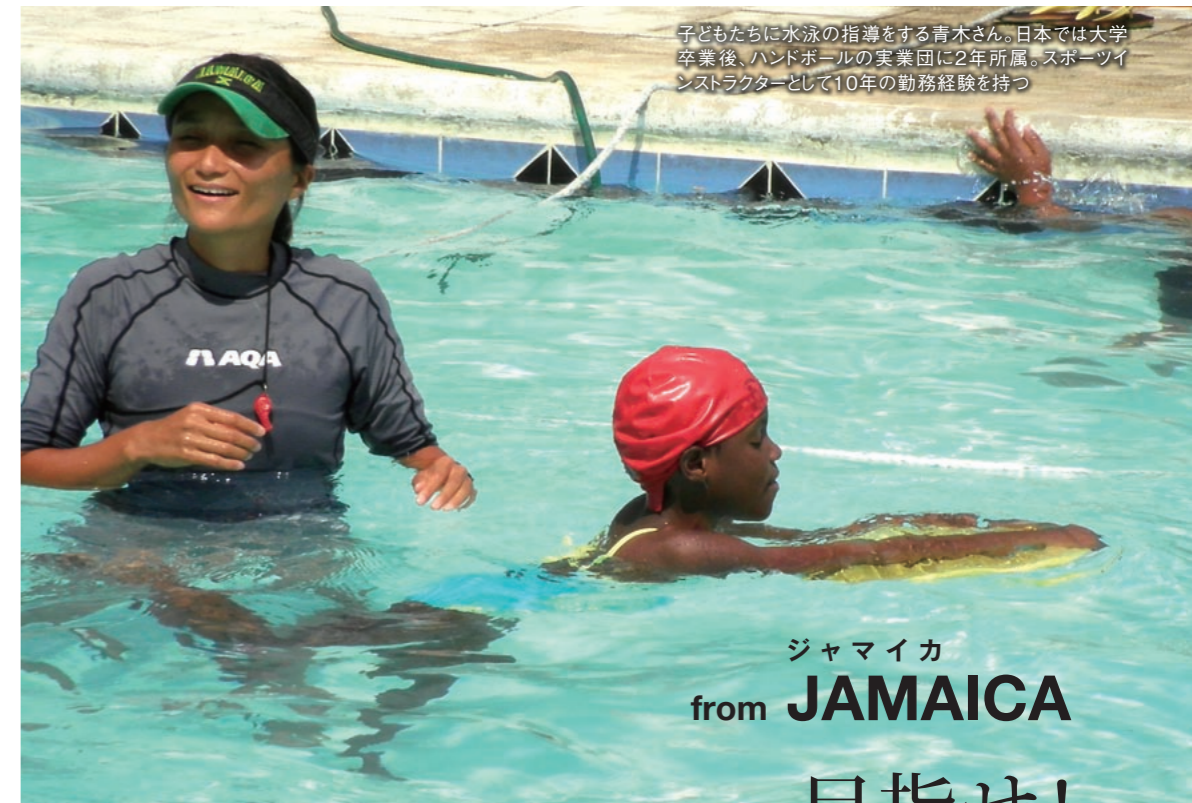
も、心身の健康の維持、ストレス  
発散などに有効なアプローチだ。  
しかし障害の度合いによっては、  
マンツーマンの補助、特殊器具の  
導入などの環境整備が必要で、普  
通校に比べて配慮すべき点が格段  
に多い。また「スポーツは危ない」  
と、教師や保護者の理解もなか  
な得られないのが現状だ。

青木さんの学校では、これまで  
も週1回、体育の授業があった。  
しかし、本当に「ある」だけ。授業  
らしい授業は行われず、ほとんど  
「遊び」の時間と見なされていた。  
そこでJICAは障害者スポーツ  
の普及を図るべく、2005年か  
ら「救世軍視覚障害者学校」に青  
年海外協力隊員（体育）を派遣。  
学校にあったプールを活用し、全  
身を使う「水泳」を取り入れなが  
ら体育の授業に取り組んできた。

**水泳を通じて  
成長する子どもたち**

一代目の隊員は2年間放置され  
ていたプールの維持管理体制を立  
て直し、水泳の授業を再開。二代  
目の隊員は体育の授業を定着させ  
るべく、器械運動、陸上競技、縄  
跳びなどを取り入れた。そして青  
木さんは三代目。「過去に派遣さ  
れた2人の隊員がしっかりと土台  
を作ってくれていたので、スムー  
ズに活動に入ることができました。  
私に求められていたのはその

子どもたちに水泳の指導をする青木さん。日本では大学  
卒業後、ハンドボールの実業団に2年所属。スポーツイ  
ンストラクターとして10年の勤務経験を持つ



ジャマイカ  
from **JAMAICA**

**目指せ！  
未来のパラリンピック**

オリンピック終了後、次に幕を開けるのがパラリンピック。  
障害を抱えた選手たちが繰り広げる熱戦は、世界中の人々の心をつつ。  
心身の健康維持はもちろん、リハビリ効果も期待できるスポーツ。  
JICAもその効果に注目し、障害者支援の一環として普及を進めている。



が多い国だ。  
青木さんが派遣されているの  
は、首都キングストンにある「救  
世軍視覚障害者学校」。視覚に障  
害のある5才から18才までの子ど  
もたちが通う学校だ。ジャマイカ

国内でも視覚障害者の学校は、青  
木さんの派遣先を含めて2校しか  
ない。「障害児を対象とした特別  
支援学校の数が足りない上に、校  
内も整備が行き届いてない学校が  
多い」と青木さんは話す。

彼女が担当するのは体育の授  
業。障害のある人にとって、スポ  
ーツはリハビリやセラピーの一環  
としても重要な役割を果たす。日  
常生活の行動にどうしても制限が  
出てしまう子どもたちにとって



スポーツが大好きで、走るのが得意な子も多い。青木さんはやる気のある生徒を集めて、早朝から  
一緒に筋トレやマラソンの練習をしている

先。子どもたちに体育を楽しんで  
もらえるようになること、そして、  
スポーツを通じて規律を身に付け  
てもらうことでした」と青木さん  
は話す。  
目が不自由であるが故に、最初  
は何をするにも怖がる生徒が多か  
った。まずは「体を動かすのは楽  
しい」と感じてもらいたい。青  
木さんはプールにコインを沈めて  
拾うゲームや水中エアロビクスな  
ど、「遊び」の要素をふんだんに  
取り入れた。そうすると次第に、

「プールに入るのが待ち遠しい！」  
という子が増えてきたのだ。  
「プールの日は興奮状態。その  
割には、水着を忘れてきたり、時  
間通りに来なかったりするので  
す」と青木さん。ビート板は散ら  
かし放題、ゴーグルもすぐになく  
なってしまふ…。そこで青木さん  
は、生徒たちにしつこいくらい、  
一つ一つ指導を続けた。「ただ厳  
しくするのは逆効果。ルールを守  
ればプールの自由時間が増えるな  
どの工夫をしました」。そうして

いるうちに、いつの間にかみんな  
が自発的に片付けをするように。  
「二人で黙々とプールの掃除をし  
ている男の子を目にした時には、  
胸がいっぱいになりました」。  
「もっと泳げるようになって、  
将来は人を助ける仕事がいい」  
というガーフィールド・ミッチェ  
ルくん（15歳）。生徒たちは確実に、  
体育の授業を通じて頼もしく成長  
している。校内でスポーツ委員会  
を担当するシェリン・トンブソ  
ン先生は「スポーツを通じて子ど  
もたちに自信が生まれていること  
を実感します。弱視でも全盲でも、  
みんながスポーツを楽しめるよう  
な環境づくりをしていきたい」と  
意気込む。

準備運動はスポーツの基本。最初  
は「早くプールに入りたい！」と言  
っていた子どもたちも今では自発的  
にストレッチをするように



整理整頓やプール掃除も体育の  
一環。青木さんが指導を続けた  
結果、プールは見違えるようにさ  
れいになった



## サポーターと世界のためにTake Action!

**広**島をホームグラウンドとするJリーグの「サンフレッチェ広島」。平和都市・広島を代表して、「ボール一つでできる」サッカーを通じた国際協力にも積極的に取り組む。そのきっかけとなったのが「なんとかなきゃ!プロジェクト」\*への参加。2010年からJICA中国と連携し、年1回スタジアムにJICAの研修員を招き、アフリカダンスや南米のサルサなどを披露している。「サポーターの皆さんが国際協力の興味を持つきっかけになれば」と事業本部の佐々木温さん。最初の目的はサッカー観戦でも、スタジアムに入ってしまう心は一つ。研修員たちのパフォーマンスで大盛り上がりだ。

また、選手やスタッフから「世界のために、もっと何かできることはないか」との声に応え、昨年には広島の青年海外協力隊を通じて、リサイクルのユニフォームを南米パラグアイに贈った。パラグアイは、日本がFIFAワールドカップ2010の決勝トーナメントで惜敗した国。何かの縁を感じずにはいられなかったという。「いつかサンフレッチェのユニフォームを着た子どもたちがプロになり、日本の選手と対戦してくれたら」と佐々木さんは夢を語る。サンフレッチェ広島が起点となり、Jリーグにも新しい国際協力の風が吹き始めている。

\*途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクト。実行委員会は、NPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)、JICA、国連開発計画(UNDP)。



試合前、ホームスタジアムでは民族音楽に合わせてJICA研修員たちがダンスを披露。外のブースでは国の現状や青年海外協力隊の活動などを紹介



サンフレッチェ広島のユニフォームに身を包んだパラグアイの子どもたち



## 合同運動会で復興を目指す心をはぐくむ

紛争、震災の悲しみを乗り越え、人々の笑顔があふれた運動会だった



宮城県名取市で行われた運動会には、南北スーダンから22人が参加。一生忘れられない一日となった



**ア**フリカ東部、スーダンで医療分野を中心とした国際協力に取り組むNPO法人ロシナンテス。代表の川原尚行さんは2011年3月11日、一時帰国の際に東日本大震災に見舞われた。「研修のためにスーダン医師を連れて帰国中でしたが、医師として何かせざるにいらませんでした」。震災3日後から、日本のスタッフやボランティアを動員し、宮城県名取市閑上地区を中心に巡回診療やがれきの撤去作業などに取り組んできた。

このような活動を通じて、津波の恐怖を経験した被災地の人々と、南北に分断されたスーダンの子どもたちの中には共有できる部分がたくさんあると感じたロシナンテスのスタッフたち。被災地に元気を取り戻したいと、震災から4か月後の7月、南北スーダンの子どもたち22人を被災地に招いた。そこで企画したことのひとつが、東北・南北スーダン合同の「大運動会」だ。南北スーダンと名取市の子どもたちが赤組と白組に分かれ、協力し合い、楽しみながら競い合った一日。南北スーダンチームから民族舞踊や歌がプレゼントされる一幕もあった。最後には全員で輪になって「閑上大漁節」を踊り、両国の子どもたちにも、運動会を見学に来た地域の人たちにも、笑顔があふれていた。「今回の交流をきっかけに彼らの間に“つながり”が生まれ、励まし合いながら成長して欲しい」。そして数年後、数十年後の再会を夢見て。ロシナンテスは「天の川プロジェクト」と称されたこの取り組みをこれからも続けていくつもりだ。

# スポーツを通じて つながる

スポーツを通じて生まれる世界とのつながり。世界各地の国際協力の現場では、日本の「スポーツマン」たちがより良い社会の実現に向けて行動している。

**南**アフリカで開催されたFIFAワールドカップ2010。19回目にして初めてアフリカ大陸が舞台となったこの大会を機に、アフリカを身近に感じた日本人も少なくないはずだ。

約1か月にわたる熱戦は、日本はもちろん、世界各地で盛り上がりを見せた。しかし、現地の状況はどうかと言えば、サッカーの人気は高いものの、テレビの普及率は低く、電気が通っていない地域もある。これまで母国のチームの試合さえ見ることができない人が多くいるという現実があった。

そこで立ち上がったのが、FIFAオフィシャルパートナーでもあるソニー株式会社。出場国であるガーナとカメルーンで、ソニーの大型映像装置を使ってパブリックビューイングを計画したのだ。「ワールドカップの感動を味わってほしい。また、これだけ多くの人が集まる機会を使って、現地の人々のためにさらに何かできればと思いました」とCSR部の富田秀実総括部長。そこでガーナではJICAと連携して、試合の前後やハーフタイムを利用してアフリカの深刻な課題の一つであるHIV/エイズに関する啓発活動を実施。青年海外協力隊員の協力も得て行った正しい知識を伝える劇やクイズ、カウンセリング、HIV/エイズ検査は、大好評だった。

FIFAワールドカップ2010におけるソニーの一連の社会貢献の取り組み「Dream Goal 2010」は、イギリスのブレア元首相が提唱した「ビヨンド・スポーツ賞」の「Corporation of the Year」を受賞。ソニーの得意分野を生かしたパブリックビューイングとミレニアム開発目標(MDGs)への貢献を融合させたことによって、スポーツを“超えた”効果を生み出した点が受賞理由の一つとして評価されている。ソニー独自の国際協力が、これから世界各地に広まっていくことを期待したい。



野外の大きな画面でガーナ選手の活躍を見守る人々。機材の準備と設営にはソニーのスタッフが汗を流した



試合の合間に行われたHIV/エイズの啓発活動







スポーツトレーニングについて分かりやすく指導するハート・オブ・ゴールドの「スポーツ大使」

### チャリティーマラソンから 始まった支援

カンボジアが誇る世界遺産、アンコールワットを走り抜ける。1996年から毎年開催されている「アンコールワット国際ハーフマラソン」は、世界中のランナーに人気のルート。内戦の負の遺産としてこの国の人々の生活を影を落とす地雷の製造・使用の禁止を訴えることを目的に、エントリー費用などが地雷被害者の自立や義手義足製造といった支援などに寄付されるチャリティーマラソンだ。

その運営を支援しているのが、岡山を拠点とするNPO法人ハート・オブ・ゴールド。設立したのは二人のオリンピック女子マラソンメダリスト、有森

裕子さんとニュージールランド元代表のローレン・モラーさん。「アンコールワット国際ハーフマラソン」の第1回、第2回大会に出場したことをきっかけに、「スポーツを通じて誰かの役に立ちたい」との思いを共有した二人が、この大会の継続を目指して共同で立ち上げたのだ。

「こんなに暑いのに、どうしてマラソンなんて走るの？」  
当時、カンボジア国内での反応はその程度。しかし、ハート・オブ・ゴールドはカンボジア側の実行委員会の運営能力を高めるべく、現地の人々と協働で当日の運営のほか資金調達や広報などの支援に取り組んできた。その結果、第1回では14の国・地域から654人だった参加者は回を重ねるごとに増え、昨年の第16回には58の国・地域から5230人が参加。多くの地元ランナーも誕生し、この大会で育った選手が国際大会に出場するまでになった。「現地の人々が主体的に大会を運営できるまでに成長してくれました」と、ハート・オブ・ゴールド東南アジア地域事務所の山口拓さんは話す。

### 子どもたちのために 体育を変えよう

「アンコールワット国際ハーフマラソン」の支援を続けるうちに、輪が広がり、ハート・オブ・ゴールドの活動は広がりを見せる。その転機となった



国際協力の担い手たち

## NPO法人 ハート・オブ・ゴールド

### マラソンを出発点に “輪”を広げる

開発途上国でスポーツを通じた国際協力に取り組むNPO法人ハート・オブ・ゴールド。マラソン大会の運営や体育授業の改善など、カンボジアを舞台に活動の場を広げている。

世界中からランナーが参加する。障害者に向けたコースもあるアンコールワット国際ハーフマラソン



ハート・オブ・ゴールド設立のきっかけとなり、運営支援を続けているアンコールワット国際ハーフマラソン

のは、アンコールワットのあるシエムリアップ州のスポーツ課と01年から開催していた「スポーツを通じた青少年指導者育成の祭典」だった。

1年目は、スポーツ大使として日本の有名選手が現地の子どもたちと一緒に参加するスポーツ大会だったが、2年目にはカンボジアの若手スポーツ指導者を対象にトレーニング法を伝える人材育成にフォーカス。そして3年目には教育省スポーツ局との共催となり、ハート・オブ・ゴールドのスタッフ、日本からのスポーツ大使、両国の学生ボランティアが教育省の職員と国内を巡回して指導方法を普及したり、クメール語で作成された各種スポーツのルールブックや指導法マニュアルを配布する活動などに発展した。

この支援が評価され、ハート・オブ・ゴールドは06年からJICA草の根技術協力事業を通じて、筑波大学と連携し「カンボジア小学校体育科指導書作成支援」事業を実施することになった。

カンボジアには、体育を通して何を教えるか教育目標や指導内容がまとめられた体育科の指導要領がな



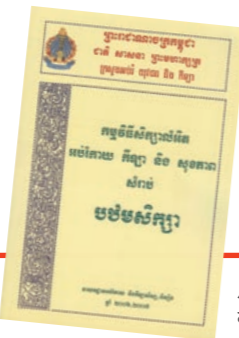
授業に取り入れる競技や指導方法を工夫し、子どもたちが楽しみながら参加できる体育になった

った。また、教育関係の行政官も体育教員も体育の授業を受けた経験が、ゼロで、一部の教育関係者を除いて、体育教育の重要性が理解されていない。そこで、教育省の行政官や学校教師とともに教育目標や指導内容を検討し、体育科の指導要領と教員用の指導マニュアルを作成することに。「何度も何度も話し合い、内容を検討する果てしない作業でした」と山口さんは振り返る。

その苦労が実を結び、完成したのが体育指導要領と指導法マニュアルだ。指導要領では、学年ごとに身体技能の発達やチームワークの順守など保健体育の目的が掲げられ、低学年には鬼ごっこなどを使った遊びやボール遊び、高学年には基本運動や球技などを取り入れてスポーツの意義を伝えるといった指針がまとめられている。

この成果を受けて、09年からはJICA草の根技術協力事業「カンボジア小学校体育科振興プロジェクト」を通じて、作成した指導要領の内容に沿った授業が広まるよう、教育省行政官や体育教員などを対象に講習会を実施。教育省の職員を、ナシヨナルトレーナーとして育成し、彼らが全国の小学校や教員養成校で指導している。

「体育が楽しくて仕方がない！」  
新しい体育の指導法が取り入れられた小学校では、そんな生徒の声が聞かれる。整列など集団行動を学ぶだけの時間から、楽しく多様なことを学べる時間に変ったのだ。できる人が、できることを、できる限り取り組む。ハート・オブ・ゴールドのモットー。マラソン大会や体育授業の改善などの支援を通じ、これからは国際協力の輪を広げていく。



ハート・オブ・ゴールドの支援で作成された小学校の体育の指導要領



**マラソン大会を通じて  
障害者の社会参加を促す**

4 月初旬、まぶしい日差しが照りつ  
ける中、真つすぐに引かれたスタ  
ートラインに並ぶランナーたち。みんな  
どこか緊張した面持ちだが、これから始  
まるイベントに胸を躍らせている。  
「水分補給はしつかりと。無理はしな  
いこと！」

そうハキハキと声を掛けられているのは、  
夏季オリンピックの女子マラソンで二大  
会続けてメダルを獲得した有森裕子さ  
ん。ここは中東の国ヨルダン。現役引退  
後、自らNGOを立ち上げてスポーツを  
通じた国際協力に取り組んできた有森さ  
ん(18ページに関連記事)。カンボジア

を中心に独自に活動を展開してきたが、  
今回は「なんとかしなきゃ!プロジェクト」  
ト※「著名人メンバ―としてヨルダンを  
訪問することに。青年海外協力隊の上岡  
廉さん、相坂慎吾さんが企画した「知的  
障害者のマラソンへの挑戦」をサポート  
することが主な目的だった。

ヨルダンでは、社会的に弱い立場にい  
る人たちの社会参加の機会が限られてい  
る。特に障害のある人に関しては、スロ  
ープや点字ブロックなどのインフラの不  
足に加え、周囲の偏見などが残っている  
ことも影響している。上岡さんらの派遣  
先である障害者施設「カラク・ケアセン  
ター」では入所者が、外へに出て行く機  
会を増やそうと、地域の清掃活動への参  
加、スポーツジムでのトレーニング、軽

**有森裕子さん**

**障害を乗り越えて走る**

**死海マラソン inヨルダン**

現役引退後、NPO法人ハート・オブ・ゴールドの代表理事として  
スポーツを通じた国際協力に取り組んできた有森裕子さん。  
今年4月、中東のヨルダンで開催された「死海マラソン」に  
知的障害者の伴走者として参加。  
国境を超えて生まれる、スポーツの力を実感した。



田淵さん(上写真中央)の生徒たちが作ってくれた応援旗は、多くのラン  
ナーたちの励みとなった。有森さんも自ら手に取って伴走(下写真)

度障害者への就労支援などに取り組んで  
きた。  
そして上岡さんが新たに企画したの  
が、ヨルダンで年一回開催されている「死  
海マラソン」への挑戦だった。「死海マ  
ラソン」は、体が浮く、ことで有名な死  
海周辺を舞台にしたマラソン大会。フル  
マラソンの場合、標高900メートルの  
スタート地点から標高マイナスイナス400メ  
ートルの死海を目指して走る。ゴール地  
点の標高が世界で最も低いことで有名  
だ。「障害者の社会参加を実感できる良  
い機会だ」と思ったんです」と上岡さん。  
最初は「マラソンなんて危険だ」と反対  
されたが、隊員たちは粘り強く話し合い  
を重ねた。そしてついに2010年、日  
本人ボランティアによる伴走付きを条件  
に、知的障害者の10キロコースへの参加  
が実現したのだ。

それ以来、上岡さんはずっと「いつか  
有森さんに伴走者として参加してもらえ  
たら」と考えていた。そして2012年  
4月、ついにその夢が実現。走る速度も  
体力も違う参加者と、どのように安全に  
伴走してもらうかなど課題は山積みだっ  
たが、別の障害者施設で活動する安藤未  
来さんら他の協力隊員の協力も得なが  
ら、一致団結して準備を進めてきた。最  
終的にはJICAヨルダン事務所やアメ  
リカのボランティア団体、障害者施設の  
スタッフなど40人近くの協力者が集まっ  
た。

マラソン大会の前には、ヨルダン国内  
の青年海外協力隊の活動現場を見て回っ  
た有森さん。首都アンマンにあるパレス  
ナ難民キャンプ内の学校では、田淵和  
恵さんがアラビア語で美術を教えてい  
た。有森さんが「死海マラソン」に出場  
すると聞き、この日の授業は応援用の旗  
作り。「田淵先生の授業はどうですか」  
と生徒の一人に話しかけると、「いつも  
愛情いっぱい接してくれる。学校に来  
るのが楽しみです」と恥ずかしそうに答  
えてくれた。他の学校でも、隊員の三角  
稍恵さん、森本和馬さんの体育の授業を  
視察し、準備体操やランニングにも参加。  
有森さんは「体を動かすと気持ちいいよ  
ね」と生徒たちに声を掛けていた。  
そして迎えたマラソン当日。午前中  
にもかかわらず、すでに30度を超える暑  
さに見舞われたが、10キロのコースの参  
加者は実に3000人以上。大音響でク

**国籍・人種・障害を  
超えるスポーツ**

マラソン大会の前には、ヨルダン国内  
の青年海外協力隊の活動現場を見て回っ  
た有森さん。首都アンマンにあるパレス  
ナ難民キャンプ内の学校では、田淵和  
恵さんがアラビア語で美術を教えてい  
た。有森さんが「死海マラソン」に出場  
すると聞き、この日の授業は応援用の旗  
作り。「田淵先生の授業はどうですか」  
と生徒の一人に話しかけると、「いつも  
愛情いっぱい接してくれる。学校に来  
るのが楽しみです」と恥ずかしそうに答  
えてくれた。他の学校でも、隊員の三角  
稍恵さん、森本和馬さんの体育の授業を  
視察し、準備体操やランニングにも参加。  
有森さんは「体を動かすと気持ちいいよ  
ね」と生徒たちに声を掛けていた。  
そして迎えたマラソン当日。午前中  
にもかかわらず、すでに30度を超える暑  
さに見舞われたが、10キロのコースの参  
加者は実に3000人以上。大音響でク

**特別レポート**

文=戸倉裕子(JICA職員)  
写真=久野真一(JICA広報室)



「第19回死海マラソン」で知的障害者の  
伴走をする有森さん。  
企画者の上岡さん  
(右)らの努力により、  
障害者の社会参加へ  
の道が切り開かれた

ラブ音楽が流れる中、  
スタート地点は開始を  
待つ人たちの熱気であ  
ふれていた。中には車  
いすの参加者も。道端  
でラクダに乗った少年  
がその様子を眺めてい  
るのもヨルダンらしい。  
「ピー!!」。ホイッス  
ルの音とともに、一般  
参加者に続いて20人の  
知的障害者ランナーが  
伴走者とともに走り出  
した。先頭は有森さん  
だ。覚えてたのアラビア語で「ヤッラ!  
(Oh, yes)」と大声でみんなを励ます。  
途中、沿道からは難民キャンプ内の学校  
で作られた旗が力いっぱい振られてい  
た。そして約3時間後、全員が満面の笑  
みでゴールラインを踏んだ。  
今回のヨルダン訪問を「とても貴重な  
体験だった」と振り返る有森さん。スポ  
ーツを通じた交流は、国籍・人種・障  
害の有無の壁を超える、ことをあらため  
て実感したという。「私自身、たくさん  
の人に応援してもらって選手生活を送る  
ことができた。スポーツを通じて応援し  
ていくことで、今度は私がみんなに元氣  
を与えていきたい」。有森さんはこれか  
らの現場で走り続けていく。



難民キャンプ内は男女別の学校が多い。協力隊員  
の活動する学校でジョギングに参加する有森さん



協力隊員が活動する幼稚園も訪問。小さな子どもたちが有森さんの周りに集まり、  
アラビア語で一生懸命に話しかけていた

※途上国の現状について知り、一人一人ができる国際  
協力を推進していく市民参加型プロジェクト。実行委  
員会は、NPO法人国際協力NGOセンター(JAN  
IC)、JICA 国連開発計画(UNDP)。



### 途上国の人々の「声」に耳を傾け 効果的な支援を実現したい



JICAエチオピア事務所

市川 裕一

ICHIKAWA Yuichi

大学院卒業後、IT関連企業に5年間勤務。退職後、青年海外協力隊に参加。2007年にJICAに就職。総務部、情報政策部、経済基盤開発部を経て、2011年9月から現職。

JICAエチオピア事務所では農業分野のプロジェクトを担当する市川裕一さん。民間企業での勤務や青年海外協力隊での経験を生かし、現地の人々が未来への希望を持てるよう、効果的な支援を届けるために奮闘している。

## 学

生時代は休みになるとバックパックを背負い、東南アジアなどを旅していました。そこで初めて日本とは違う多様な文化を目の当たりにし、それまで考えていた「常識」が通用しない世界があることを知ったのです。

しかし、当時は国際協力の仕事に就きたいと思っていたわけではなく、卒業後はしばらくIT関連の企業でシステムエンジニアとして働きました。人生の転機は、同僚の父親がJICA関係の仕事で開発途上国を飛び回っていると聞いたこと。その時、初めて「JICA」という組織について知ったのです。学生時代の記憶がよみがえり、自分の技術を途上国の発展に生かすことができれば素晴らしいなと。そこで思いきって退職を決定し、青年海外協力隊に挑戦しました。

派遣されたのはアフリカの馬拉ウイ。大学内のネットワーク構築やデータベース管理など、情報を適切に運用する管理者の育成に従事しました。停電が多く、突然コンピュータの電源が切れて作業できなくなったり、自分が指導した技術が期待通り活用されなかったりと、国際協力の難しさを身をもって学んだ2年間でした。試行錯誤を経て知ったのは、現地の人々が今の生活に精一杯で、将来を考える余裕がないということ。自分の未来に希望を持てる人を一人でも増やしたいとの思いが募り、国際協力を一生の仕事にしようとJICAへ就職しました。

3年目に配属された経済基盤開発部では、民間企業での経験を生かし、JICA-Netの活用促進を担当しました。これは、いわゆるテレビ会議装置を使って遠隔で技術協力をを行う手法。時間やお金などのコストや安全面の制約がある中、JICA-Netをうまく使えば、限られた条件でも事業効果を高めることが可能になります。例えば、アフリカ12カ国を対象に実施した教育関係の遠隔研修では、日本の教師育成制度をJICA-Netを使って紹介することで、参加国が同時に自国の抱える課題について考える機会を作ることができました。このようなJICA-Netの好事例をJICA職員や専門家に広め、実際に事業に活用してもらうことが当時の私の役割でした。

現在はIT分野から離れ、エチオピア事務所では農業分野のプロジェクトを担当しています。気候変動などによる干ばつの影響もあり、この国では食料安全保障が喫緊の課題です。その解決に向けて立ち上げから関わっているのが「農村地域における対応能力強化緊急開発計画策定プロジェクト」。エチオピアでも特に南東部は乾燥した気候で、水不足の影響が人々の生活に直結して表れています。JICAも他ドナーと協働で物資の援助を行ってききましたが、こうした対処療法だけでなく、自然災害が起こっても耐え得る「強さ」を住民自身が身に付けられ



近年頻発する干ばつが住民の生活にどう影響を与えているか、市川さんも同行して調査を進める

るよう支援することがより重要です。そこで、この地域の人々が干ばつでどんな被害を受けているか、その上で、「強さ」を備えるにはどんな支援が必要かを調査。それを踏まえてエチオピア政府とプロジェクトのアウトラインを決定し、現在は、その内容について詳細を詰めているところです。

JICA職員が果たす役割は、技術を伝える日本人専門家やコンサルタントと、それを受け取る途上国政府や現地の人々との間をとりもつこと。そして、日本側が支援できることと途上国側が求めていることの間で、最大公約数を導き出す。それが私たちの腕の見せ所です。これからも現地の人々の声をしっかりと拾い、政府担当者や協力しながら効果的な支援を実践していきます。



土壌侵食の防止や森林保全をテーマにした農家向けのワークショップを視察



田中理事長、タンザニアとケニアを訪問

01

田中明彦JICA理事長は5月27日から6月3日まで、タンザニアとケニアを訪問しました。

タンザニアでは、最大の都市ダルエスサラームでJICAの支援現場の視察や専門家との意見交換を行った後、北部のアルーシヤで開催されたアフリカ開発銀行の年次総会に出席。30日にはサイドイベント「貿易および地域統合のための援助」にパネリストとして登壇し、「域内貿易統合の障害の除去」と題して講演。田中理事長は、「急速な発展を続けるアフリカが経済成長を加速させるためには、アジアや中南米に比べて3〜5倍のコストがかかっている域内貿易の効率化が必要」と指摘した上で、「国境での税関や出入国管理手続きを迅速化するワンストップボーダーポスの整備など、JICAの取り組みを紹介しました。」

田中理事長は、翌31日の本会合に出席した後、ジャカヤ・ムリシヨ・キクウエテ大統領と会談。大統領は、来年6月に横浜で開催される第5回アフリカ開発会議(TICAD V)について「タンザニア、そしてアフリカにとって大変重要なイニシアチブとなる」と期待を示すとともに、「コメの増産に向けた灌漑施設の整備など農業分野の包括的な支援を要請しました。田中理事長

は、JICAが1980年代から支援するキリマンジャロ農業開発センターなどを視察したことに触れ、農業分野での継続的な支援を行うことを表明しました。

その後、田中理事長は6月1日からケニアを訪問。円借款によって建設が進んでいるオルカリア地熱発電所や、小規模園芸農民の組織を強化・振興する技術協力プロジェクトなど支援の現場を視察したほか、同国で需要が高まっているインフラ整備の環状道路とナイロビ市内のウゴンゲ道路拡幅のための贈与契約を結びました。こうしたインフラ開発は、「流通の促進や都市交通の渋滞緩和などを実現するとともに経済的波及効果も高い」(ギエタ財務大臣)と、同国から高い期待が集まっています。ムワイ・キバキ大統領も、道路開発事業について「物流ルートの確保ができることで、ケニアだけではなく東アフリカ全体に貢献する」との認識を示しました。

アフリカ訪問を終えた田中理事長は、「アフリカ諸国の現状について理解を深めることができた」とした上で、「各国が抱える課題は多様なため、柔軟な対応が必要。国境をまたぐ紛争問題の解決や域内経済の活性化の観点からも、地域的な視点が求められている」と総括しました。



アフリカ開発銀行の年次総会では、域内貿易の効率化や経済変革などについて議論が交わされた



ケニアのキバキ大統領と会談し、隣国ソマリアの状況についても意見交換

沖縄エコアイランド・シンポジウム2012開催

02

5月25、26日に沖縄県で開催された「第6回太平洋・島サミット」。その直前の23日、JICAは同県と共に、宜野湾市で「沖縄エコアイランド・シンポジウム2012」島と命を守る新たな挑戦」を開催しました。当日は、国際機関をはじめ、ミクロネシアやフィジー、パラオなど太平洋諸国の政府や各国の民間企業、日本の自治体、日本企業、NGO、大学関係者ら200人以上が出席しました。

「エコアイランド」とは、環境への負荷が少ない農業を営んだり、廃棄物を適正に管理したり、低炭素化などの気候変動対策に島全体で取り組むことを掲げたコンセプト。シンポジウムでは、これを推進している宮古島市の梶原健次課長補佐や一般財団法人南西地域産業活性化センターの緑川義行部長が、沖縄の自治体や民間企業の取り組みを紹介。さらに、大洋州11カ国を対象にしたJICAの「大洋州地域廃棄物管理改善支援プロジェクト」を率いる天野史郎チーフアドバイザーも、同プロジェクトについて発表しました。その後、参加者が水や廃棄物分野における課題と対策について意見交換を行う場も設けられ、民間と行政の連携を強化する重要性が確認されるとともに沖縄と島しょ国が相互に学ぶ機会となりました。



太平洋諸国での水や廃棄物にかかわる課題への取り組みが発表された

マレーシア日本国際工科院の開講式開催

03

6月1日、マレーシア日本国際工科院(MJIIT)の開校式が首都クアラルンプールで行われました。

MJIITは、学部と大学院を併せ持ち、日本の工学教育の特長でもある研究室活動を軸とした「講座制」を通じ、研究開発能力を持つ人材を育成することを目指しています。設立にあたり、JICAは円借款「マレーシア日本国際工科院整備事業」で研究活動に必要な機材や教育カリキュラムの整備を支援。また、大学運営や産学連携を支援するため、MJIIT副院長として木下智見JICA専門家(九州大学名誉教授)などを派遣しています。さらに、日本国内の24大学とも連携しており、日本人教員を派遣しています。

開校式には、ナジブ・ラザク・マレーシア首相のほか、鳩山由紀夫総理特使、加藤重治文部科学省国際統括官、荒川博人JICA理事らが出席。ナジブ首相は、「MJIITは日本とマレーシアのきずなの証し。両国の産業界の強い連携を生かすためにも、専門性と起業家精神を備えたエンジニアがここで育つことを期待しています」とスピーチ。将来的には東南アジア諸国連合(ASEAN)や中東諸国からも学生を受け入れ、日本型工学教育の国際拠点となることを目指しています。



開校式に出席した荒川理事、中村滋駐マレーシア特命全権大使、鳩山総理特使、ナジブ首相(後列左から)



「青年海外協力隊OB」

# 米本 竜馬さん

YONEMOTO Ryuma

## 洪水被害を受けた高齢者を支援

1階部分が水に浸かった家屋、機能しなくなった工業団地、避難所で暮らさざるを得ない人々…。昨年10月にタイを襲った大洪水は、日本を含め、世界各国で大きく報道された。7月から降り続いた大雨によりタイ北部から首都バンコクへと流れるチャオプラヤ川が氾らんし、日本企業が多く進出しているアユタヤの工場地帯を含め、バンコクの都市機能も一時的に麻痺した。12月にはやっと水が引いたものの、住居や建物の壁や床は泥だらけ。家財が流されたり、長期間水に浸かっていたせいで傷んだり、人々の生活が元通りに

# JICA Volunteer Story

PROFILE

1976年岡山県出身。2006年に都立保健科学大学卒業後、理学療法士として病院で勤務。2010年1月から2年間、青年海外協力隊(理学療法士)としてパプアニューギニアで活動。帰国後、2012年2月から1カ月間、甚大な洪水被害を受けたタイに派遣。

# 「洪水被害から立ち直り、健康的な生活を取り戻してほしい」

昨年秋に50年ぶりともいわれる大洪水に見舞われたタイ。多くの家屋が浸水し、人々の日常生活、そして経済活動に多大な影響を及ぼした。数カ月が経過しても被害のつめ跡が多く残る中、洪水からの復興支援ボランティアとして3人の青年海外協力隊員が派遣された。



入居者と工作を行う米本さん。「理学療法士としてお年寄りとして接してきた経験を生かすことができました」

なるにはまだ長い時間が必要な状況だった。

首都バンコクから北へ50キロに位置するパトウンタニーも、洪水被害からの復興が急がれていた町の一つ。そこで、2012年2月にこの町に緊急派遣されることになったのが、米本竜馬さん(理学療法士)、廣瀬美香さん(作業療法士)、奥村拓矢さん(PCインストラクター)の3人の青年海外協力隊員だ。配属先は、家庭の事情などにより自宅で生活することが困難になった高齢者が共同生活を送っている高齢者社会福祉開発センター。廣瀬さんがこのセンターで2012年1月までの2年間、協力隊員として活動していたことが縁となり、今回の派遣が実現した。派遣期間は1カ月。施設の復旧や入居者の生活の質を向上させることが目的だ。

「二時避難していた入居者たちは12月にはこのセンターに戻ってきていました。私たちが赴任した時は、洪水で流されてきた大きなゴミが撤収され、ようやく施設が機能し始めたころでした」と米本さんは振り返る。理学療法士としてパプアニューギニアでの活動を終え帰国したばかりだったが、タイは活動中にリンパ浮腫についての研修を受けるため訪れたゆかりのある地だったため、今回の短期派遣への参加を決めた。

## 3人の専門性を生かして 入居者の健康増進を目指す

まずは現場でどのような支援が必要とされているか知るために、入居者にアンケートを取った。すると、「個人用の棚が流されてしまったので、代用品が欲しい」「腰や膝が痛いので和らげる方法を知りたい」「車いすの修理が必要」などの声が上がってきた。「アンケートを基に計画を立て、できることから始めることにしました」と米本さん。設備の復旧のため、水に浸



a.ポスター作成用に翻訳したタイ語をセンター長のシティアポー・チューイナークさんにチェックしてもらった廣瀬さん(中央)と奥村さん(右)  
b.体の痛みを和らげる体操を図説するポスター。企画から写真撮影、デザインまで丁寧に作業し、完成したのは活動最終日  
c.プランターや花だんに花を植える入居者と一緒に隊員たちも作業。こうした活動が彼らの心のケアにつながった  
d.最初はセンター施設の復旧が主な活動。浸水で汚れた壁を清掃し、ペンキを塗り直す

かって汚れたまま放置されていたベッドの清掃や壁のペンキ塗り、パンクしていた車いすの修理、また、入居者の心のケアの一環として花が枯れてしまったプランターと一緒に花を植えるなど、活動は多岐にわたった。米本さんは「センターのスタッフと入居者のニーズが違ったので苦労しました。スタッフの優先課題は施設の清掃や修理でしたが、入居者たちはそれぞれ個別の要望を抱えていました。タイでは人間関係が非常に大事。この施設で活動経験がある廣瀬さんと、同国で協力隊員として活動していた奥村さんがそれぞれの立場の人に気を配りながらうまく調整してくれたので助かりました」と話す。

3週目からは、各自の専門性を生かした活動へとシフトすることに。入居者が、心身ともに健やかに生活できるようにしてほしい。その願いを込めて3人が取り組んだのは、健康増進に役立つ情報が載ったポスターの作成。首、肩、膝の痛みを和らげるために自分でできるエクササイズや、笑顔が健康にもたらす効果、野菜から取れる栄養素の解説、施設紹介の4種類を作成して施設内に掲示することで、できるだけ多くの人々に情報が伝わるようにした。「私と廣瀬さんが専門知識を生かしてどんな内容にするかを考え、写真を撮り、その素材を使って奥村さんがパソコンで作成してくれました。私と廣瀬さんは医療が専門なので専門用語を使いがちだったので、奥村さんがその表現は難しいんじゃない? など意見を出してくれて、分かりやすいポスターを作成できました。まさに3人の協働作業でした」と語る米本さんは振り返る。

お互いの専門性を生かしてチームとして活動した3人。あつという間の1カ月だったが、人々の声を聞き、ニーズを見極め、柔軟に対応した彼らの活動は、入居者の笑顔を引き出すことができたに違いない。



# 横浜から世界へ 羽ばたく



フィリピン産のバナナを食べながら、現地の人々の生活について学ぶ。1年生にとっては初めての「国際学習」。「楽しく学ぶ」ことがコンセプトだ

総合的な学習の時間の一環として、「国際学習」を取り入れている横浜市立平楽中学校。全校挙げてのこの取り組みは、今年で14年目を迎える。3年間の授業を通じて生まれたさまざまな、気付きが子どもたちの「行動」を後押ししている。

## 国際都市・横浜から 足元を見つめる学習を

観光地としても有名な横浜の中華街から「港の見える丘公園」を抜け、しばらくバスで走っていくと、住宅街の一角にある校舎から元気な声が聞こえてきた。  
「安くても手に入るバナナを、日本が最も多く輸入している国はどこでしょう？」  
「うーん、フィリピン？」  
「正解。フィリピンと日本は同じ島国ですが、いったいどこにあるでしょう？」  
「はい、僕、知ってる！」  
黒板にはアジアの地図が貼られており、生徒がフィリピンの場所に色を付ける。これは、横浜市立平楽中学校の「国際学習」の「コマだ」。

2009年に開港150年を迎え、世界有数の国際都市として知られる横浜市。平楽中学校では、世界のさまざまな問題に対する学びを深められるよう、ユニークな授業を取り入れている。「世界の問題に目を向けることで、自分の街や生活について見つめ直してほしい」と山義明校長。そこでスタートしたのが「国際学習」だ。公立であるが故に、数年ごとに先生は異動

する。学校として、このような取り組みを続けていくことは決して容易ではない。しかし、「子どもたちに視野を広げてほしい、共に学び合い、成長して欲しい」という確固たる思いは引き継がれ、今年で14年目を迎える。

## 教室での学びを通じて 自分ができることを考える

平楽中学校の「国際学習」は毎年5月。総合的な学習の時間を活用し、約4週間かけて行われる。1週目の授業では、全校生徒が体育館に集まって話を聞く。「まずは私たち一人一人が、地球で起きている問題に耳を傾けることから始めましょう。国際学習はその第一歩です」。山



グループに分かれて、思い思いに意見をぶつけ合う

本大祐先生の言葉に、全員が真剣に耳を傾けている。

次の学びの場は各クラスの教室。その内容は二本立てだ。まずは、日本で国際協力にかかわっている人による「出前講座」。国際協力NGO、JICA、教員、途上国からの留学生など、講師陣のラインナップは多種多様だ。「毎年来ていただいている団体もあれば、開発教育の研修などで知り合った方をお願いすることもあります。国際協力の現場で活躍している日本人から話を聞くことで、世界をより身近に感じてもらいたい」。そう話すのは山本ちなみ先生。長年にわたり、平楽中学校の「国際学習」を支えてきたキーパーソンだ。  
「実は若いころ国際協力にあこがれて、青年海外協力隊に応募したこともあるんですよ」と笑う山本ちなみ先生。教員になる前は、インドやネパールなどを一人で

旅した経験を持つ。そんな山本ちなみ先生の話も、子どもたちにとっては興味深く新鮮だ。3年生の加藤恵里奈さんは「世界には普通に学校に行けない人が多くいる。今の生活に感謝しなければならぬですね」と語ってくれた。

国際協力の「最前線」で働く人の話を聞いたたり、ワークショップを行った後は、1年生はバナナを切り口に学習、2年生は貿易ゲーム、3年生は世界で起きている問題の一つを選んで議論する。学年が上がるごとに、「学び」が進化する仕組みになっているのだ。このような一連の学習を経て、生徒たちはそれぞれの思いを作文にまとめ、校内スピーチコンテストで発表するという流れだ。「授業を通じて学んだことを言葉にし、他の仲間と共有することが大切。そして、学習したことをきっかけに自分の生き方につなげていってほしい」と山本ちなみ先生は話す。

小久保里奈さん（3年生）の昨年の作文のテーマは「地球に優しく」。「東日本大震災の後、節電を意識しているつもりでした。でも自給自足の生活を送っているラオスの人たちの話を聞いて、まだまだできることがあると感じました」。彼女の作品は「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2011」で佳作を受賞。「英語を勉強して、将来は世界の人のためになる仕事に就きたい」と目を輝かせる。



グループに分かれて、思い思いに意見をぶつけ合う



青年海外協力隊OGの森田麻由さんからガーナの話聞く生徒たち。民族衣装にも興味津々



授業内容も先生によってさまざま。教員同士で話し合い、教材にも工夫が重ねられている

## 夏休みの時間を使って、 あなたの国際協力への思いを 伝えてみよう!

### ①「JICA国際協力中学生・高校生エッセイ コンテスト2012」

テーマ：「これからの日本、これからの世界—私たちができること—」  
応募資格：中学生・高校生  
募集期間：6月14日～9月14日(当日消印有効)  
Eメール：jica.essay@joca.or.jp

### ②「グローバル教育コンクール2012」

募集部門：「写真・映像」「国際協力レポート」  
応募資格：「グローバル教育」を実践している方  
募集期間：6月4日～10月22日(当日消印有効)  
Eメール：global-oubo@joca.or.jp

問い合わせはこちら

〒102-0082 東京都千代田区一番町23-3 日本生命一番町ビル5階 (公社)青年海外協力協会内  
TEL：03-3556-5926(直通)  
FAX：03-6261-0259

詳細は、JICA地球ひろばのホームページ  
[www.jica.go.jp/hiroba/](http://www.jica.go.jp/hiroba/) をご覧ください。



# ココシリ

「ここが知りたい」  
国際協力に関係する  
いろんなトピックを  
分かりやすく解説します！



G8サミットで一同に会した首脳陣 (提供:内閣広報室)



G8第一セッションに臨む野田総理と各国の代表 (提供:内閣広報室)

### 「新たな連携体制(ニュー・アライアンス)」のカギ

アフリカの経済成長の大部分を占める農業に世界各国が官民連携で取り組むことで、アフリカ地域全体の食料安全保障の実現、世界経済の活性化を目指す。

5月18、19日、アメリカのメリーランド州キャンピングデービッドで主要8カ国首脳会議(G8サミット)が開催された。日本からは野田佳彦・内閣総理大臣が出席。各国の首脳が一堂に会し、世界の政治経済の幅広い問題について率直な意見交換が行われた。

一日目には「アフリカの食料安全保障」をテーマにしたサイドイベントをワシントンDCで実施。G8とアフリカ各国の首脳が同地域の食料安全保障の実現と栄養状態改善のため、新たな連携体制を作っていくことで合意した。

その基盤となる「ニュー・アライアンス」として合意されたのが「食料安全保障および栄養のためのニュー・アライアンス」である。今後はG8の支援の下、世界的な食料安全保障の達成に向けて、アフリカ各国の政府が効果的な政策を進めるとともに、企業やNGOなど民間

## 「G8サミットサイドイベント」 食料安全保障をテーマに 新たな連携が誕生!

セクターの積極的な関与が推奨される。また、アフリカの潜在力を引き出すために持続可能な農業の成長を促していくことにも合意。民間投資を促進するほか、農業ビジネス拡大のための資金供給・リスク回避手段の拡充などに取り組んでいく。今回、すでに世界各国の45社以上の企業が計30億ドル以上の投資を行うことを表明していることも明らかにされた。

2009年7月にイタリア・ラクイラで開催されたG8サミットでは、世界の食料安全保障に2012年までの3年間で総額200億ドルを拠出する「ラクイラ共同声明」が採択された。今回の合意はその延長線上に位置付けられ、今後10年間で5000万人を貧困から救い出すとの目標の下、これまでの取り組みを一層後押ししていく。

国際会議

## 第6回太平洋・島サミット

国際会議

# 島の問題を共有し 豊かな地域づくりを



大洋州の国・地域の代表と野田総理 (提供:内閣広報室)

5月25、26日、沖縄県名護市で「第6回太平洋・島サミット」が開催された。このサミットは1997年に日本のニューアチブで始まり、以降、3年に1度のペースで開催されてきたもの。防災、環境、気候変動、海洋問題など、太平洋の島しょ国・地域が直面する課題解決に向けて、各国首脳が議論することを目的としている。

6回目を迎える今年のサミットの舞台は、長年にわたり環境対策に積極的に取り組んできた沖縄県。日本をはじめ、サモア、パラオ、トンガ、ツバル、ミクロネシア連邦、クック諸島などのほか、アメリカやオーストラリア、ニュージーランドなどを加えた計17の国・地域が参加した。

2日間の議論を経て採択されたのは「沖縄キズナ宣言」。東日本大震災の経験を生かした自然災害・気候変動対策の支援を強化することなどが盛り込まれた点が特徴的だ。さらに日本は、今後3年間で大洋州に対して最大5億ドルの支援を行う意向を表明。また、東日本大震災の際に受けた支援から生まれた「キズナ」を再確認し、今後さらなる関係強化のため、継続的な支援を行っていくことなどを強調する内容となっている。

「沖縄キズナ宣言」の柱となっているのは、①自然災害への対応、②環境・気候変動対策、③持続可能な開発と人間の安全保障、④人的交流、⑤海洋問題の5つ。今回のサミットでの議論を踏まえ、これらの5つの分野で新たな支援策を打ち出していく方針だ。

### ■「沖縄キズナ宣言」とは!?

- 1 自然災害への対応**  
太平洋災害早期警報システムの整備、自然災害リスク保険、国際会議の主催、国際原子力安全の強化
- 2 環境・気候変動対策**  
廃棄物処理、森林保全、水資源管理、再生可能エネルギー導入促進への支援
- 3 持続可能な開発と人間の安全保障**  
教育・保健・インフラ整備への支援、新興ドナーとの援助協調メカニズム、持続可能な開発におけるグッド・ガバナンス、民主主義、法の支配
- 4 人的交流**  
「キズナプロジェクト」、JETプログラムの拡大、ボランティア派遣の継続、人材交流などの防衛当局間協力、査証発給緩和
- 5 海洋問題**  
海洋環境・安全保障、漁業などの分野における協力

①の自然災害への対応については、自然災害対策の一環として「太平洋災害早期警報システム」を整備することで合意。アメリカや関係機関と協力して島しょ国・地域の観測拠点、予報・警報網の整備・拡充を目指していく。また、大規模災害時に被災地に対して迅速に資金支援ができるよう「自然災害リスク保険」の展開に向けて、世界銀行と協力して今年11月にも試行プログラムを実施していく計画だ。

②の環境・気候変動対策については、気候変動への適応および緩和についての支援を継続する姿勢が強調された。大洋州の島は、海面上昇などの地球温暖化の影響を受けやすく、早急に対策が求められている。昨年の

「気候変動枠組条約第17回締約国会議(COP17)」で打ち出された「緑の気候基金」の具体化などに取り組んでいく。

一方、東日本大震災の被災地に300人を超える若者を招く「キズナ・プロジェクト」など、大洋州の島しょ国・地域との交流も活発化していく予定。さらに短期滞在渡航者への数次ビザ発給や、外交・公用旅券所持者へのビザ免除といった措置も、二国間ベースでの協議を通じて順次実施していく。

このほかにも同宣言の中では、「新興ドナー(援助)国を既存の援助協調メカニズムに関与させることが重要」との指摘があったほか、海洋問題に対する協力を促進することの重要性などについても言及された。

## ここ

の6月、外務省から「平成24年度国際協力重点方針」が発表された。

政策

今年度の大きな柱となっているのは、東日本大震災を経て昨年12月に閣議決定された「日本再生の基本戦略」。同戦略の内容を踏まえた上で、①すでに「新成長戦略」で示されている具体的取り組みを通じた経済成長、②震災後の日本再生をさらに力強く進めていくため、世界におけるインクルーシブな成長を通じて「人間の安全保障」の実現に向けて、ODAを効果的に活用していくことが示されている。

この2つの実施に当たり強調されているのは、政府、地方自治体、NGO、民間企業、大学、個人などさまざまな機関が連携していく、ブルキャスト・ディプロマシー。それぞれの得意分野を生かして、オールジャパンで国際協力

## 「平成24年度国際協力重点方針」 ここが変わる!? 日本のODA

に取り組んでいくとしている。「新成長戦略」への貢献に関しては、パッケージ型インフラの海外展開、中小企業を含む民間企業との官民連携、グリーン成長・低炭素社会への移行といった新たな開発課題などにも積極的に対処する一方、被災地の復興と世界の防災にも貢献していく方針。また、アジアの、最後のフロンティアとして近年注目を浴びているミャンマーへの支援で主導的な役割を担うとともに、ASEAN諸国間の結び付きを強める支援を進めることとしている。

「人間の安全保障」に関しては、ミレニアム開発目標(MDGs)の実現、国際社会の平和と安定のため、アフガニスタン、中東・北アフリカ、南北スーダンに対する支援に加え、テロ・海賊対策、アジアの民主主義定着に向けた支援も行っていく方針だ。



中小企業の海外展開のため、外務省やJICAでは一般企業向けのセミナーなども実施している

### ■「平成24年度国際協力重点方針」4つのキーワード

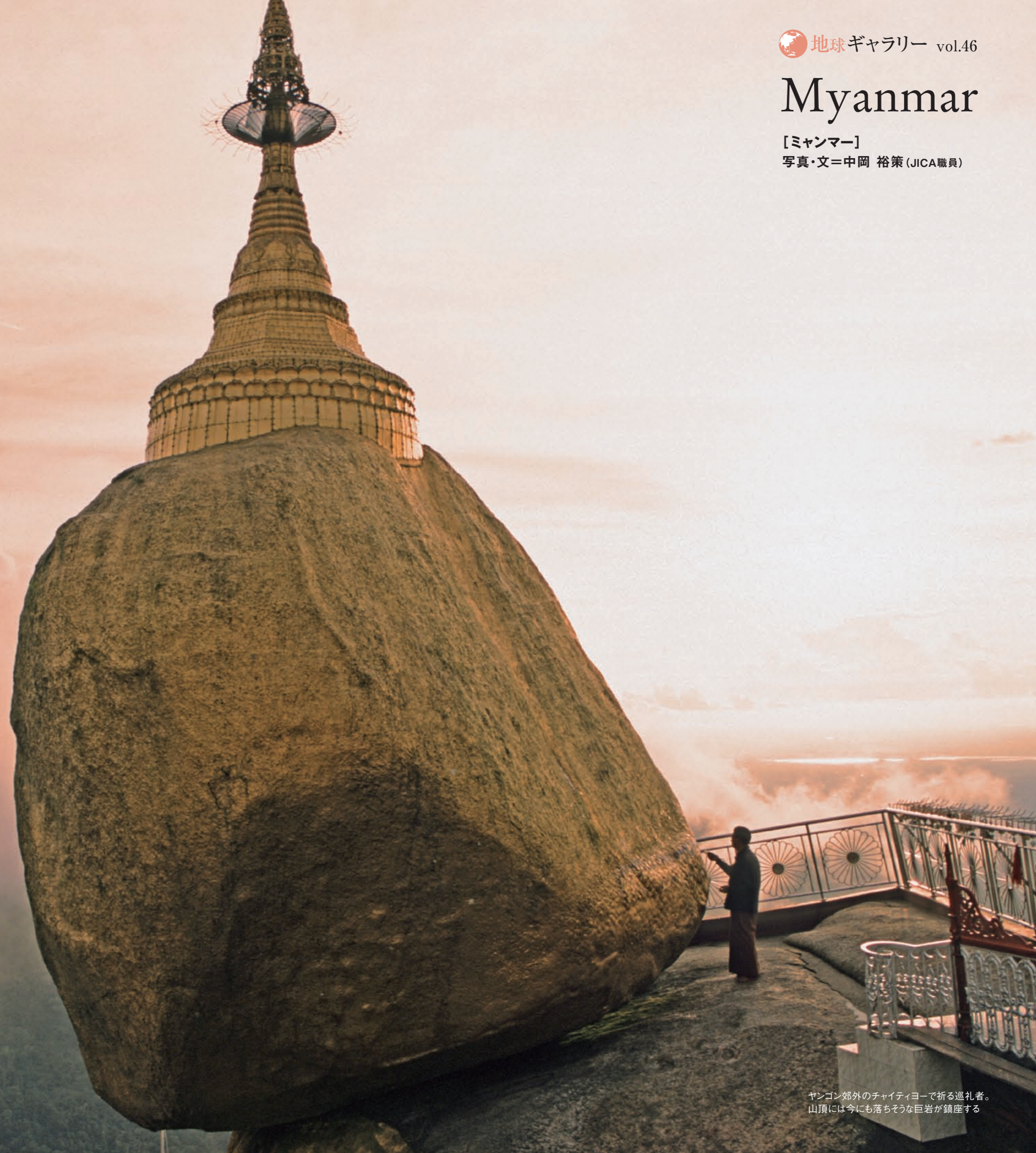
重点 1	新成長戦略への貢献・中小企業の海外展開支援
重点 2	人間の安全保障の視点を踏まえた援助と新たな開発課題への取り組み
重点 3	被災地の復興と世界の防災への貢献
重点 4	国際社会の平和と安定のための取り組み



# Myanmar

[ミャンマー]  
写真・文＝中岡 裕策 (JICA職員)

# 最後のフロンティア



ヤンゴン郊外のチャイティヨーで祈る巡礼者。  
山頂には今にも落ちそうな巨岩が鎮座する



「おーい水島、一緒に日本に帰ろう」  
 小説『ビルマの豎琴』の有名な一節だ。一昔前まで「ビルマ」と呼ばれていたが、1989年に国名を「ミャンマー連邦」に変更、2010年に「ミャンマー連邦共和国」となった。日本の約1・8倍の国土に約6000万人が暮らすこの国は、東西を中国とインドに挟まれ、地政学的に重要な場所に位置する。

人はミャンマーと聞いて、何を思い起こすだろうか。小説『ビルマの豎琴』や映画『戦場にかける橋』で描かれた戦争のイメージかもしれない。また、ある人は民主化の指導者アウン・サン・スー・チー氏や最近日本が「第三国定住」として受け入れたミャンマー難民のことを思い浮かべるかもしれない。実際にミャンマーを訪れると、想像していたよりも実に多様で、驚きに満ちた光景に出会う。



寺院にまつられている涅槃仏。どことなく表情が穏やかだ

広大な大地を包む深い緑。透き通るような青空に、白い雲が揺らめき金色の寺院が光輝く。深紅の夕陽が大地と空を赤く染め、古都が幻想的な雰囲気包まれる。自然と歴史が調和した風光明媚な景色に思わず息をのむ。



夕映えのバガン。夕陽が大地を赤く染め、2,000を超えるパゴダ(仏塔)が天を仰ぐ



ヤンゴンの路地裏でヤシの実を選別する男性。人々は強く、たくましく生きている

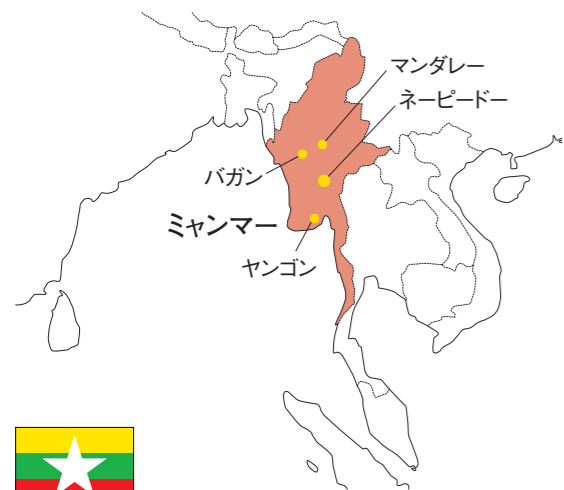


パゴダで祈る人々。青空の下、金色の寺院が輝く



露店の「くぎ屋」。今も昔ながらの風景が残る





首都：ネーピードー  
 面積：68万km<sup>2</sup>(日本の約1.8倍)  
 人口：約6,242万人(2011年)  
 言語：ミャンマー語  
 宗教：仏教、キリスト教、イスラム教など  
 1人当たり国民総所得(GNI)：379.6ドル(2009年)  
 経路：直行便はなく、バンコクやハノイなどでの乗り継ぎが一般的。  
 年内には12年ぶりに日本からの定期便が再開される予定。  
 通貨：チャット(Kyat) 1Kyat=約0.096円(2012年6月現在)  
 気候：ヤンゴンから南の海岸部は熱帯モンスーン気候、内陸部は乾燥したサバナ気候、東部～北部の山間部は冷涼で温帯湿潤気候と地域差がある。



マンダレー近郊で出会った少女。顔には「タナカ」と呼ばれる日焼け止めを塗っている

一昔前まで「ラングーン」と呼ばれていたヤンゴン。2006年に首都機能はネーピードーに移されたが、今でも経済・社会・文化の中心地だ。ヤンゴンの街を歩くと、路地には紙だけを売っている紙屋、木だけを売っている木材屋、くぎだけを売っているくぎ屋などがあることに気付く。おそらく、戦後間もない日本にもこのような光景があったのだろう。ミャンマーを訪れると、どこか懐かしさを感じる。それはこの国に、私たちが失ってしまったものがまだ残っているということなのかもしれない。

ミャンマーの人々の日常は祈りと共にある。信仰心があつく敬けんな仏教徒が多いこの地では、仏教が生活に溶け込んでいる。街中には多くの寺院が存在し、人々がそれぞれの思いで祈りをささげている。

世界三大仏教遺跡の一つ、中部のバガンには多くの仏教遺跡が残る。赤茶け



a

た大地に数千を超える寺院や仏塔が天に向かってそびえ立つ。夕暮れ時のバガンはまるで時が止まっているかのようだ。静寂の中、はるか彼方の地平線に夕陽が沈んでいく。ヒマラヤ山脈を源泉とする大河エーヤワディー川が遠くに見える。雄大な自然に抱かれ、古都バガンがたそがれに染まる。

昨今の民主化の動きに伴い、長く閉ざされてきた「扉」が今、開かれようとしている。アジアの「最後のフロンティア」として注目が集まる中、ミャンマーはこれからどこへ向かうのか。その「夜明け」の先にある未来に、世界中が注目している。



b



c

a.ミャンマーのほぼ中央に位置する街マンダレーの市場。新鮮な果物が売られている  
 b.ヤンゴンの寺院で学ぶ尼僧。きれいな薄桃色の袈裟が印象的  
 c.バガンの日常。牧歌的な雰囲気に包まれている

### ミャンマー料理 魚のスープ麺 「モヒンガー」



ミャンマーの主食は日本と同じコメ。一緒に食べるメインのおかずは、ショウガ、ニンニク、ターメリック、塩、クミンなどのスパイスで豚肉や鶏肉を煮込んだ「チャッターヒン」や「ワッターヒン」、ナマズなど魚のすり身を揚げたさつまあげのような「ナペー」のトマト煮込みなどが人気だ。これに「タマリンド」と呼ばれるママ科の果物を使った酸味のあるスープを添えて食べる。マイルドで優しい味付けの料理が多いが、辛い味が好ま

の場合は、チリパウダーを自分で追加して調整する。

そんなミャンマーの国民食は、朝昼晩食べられている麺料理「モヒンガー」。魚のだしにショウガ、ニンニク、タマネギ、レモングラスなどを加えたスープはコクのある味。スープの中にコメを原料にした麺を入れて、ひょうたんの果肉やひよこ豆の天ぷら、ゆで卵などの具を加えるのが一般的だ。

モヒンガーやお茶の葉を使ったサラダなど本場の味を楽しめるのが、東京・高田馬場のミャンマー料理レストラン「RUBY」。ヤンゴン出身のヌエ・ヌエ・チョーさんが迎えてくれ、日本在住のミャンマー人にも人気があるお店だ。



**RUBY**  
 〒171-0033 東京都豊島区高田3-11-18  
 TEL: 03-3204-5121  
 営業時間：平日11時半～14時半、17時～23時半 水曜休

#### 【材料(4人前)】

コメ大さじ2 / タマネギ1個 / サバ水煮缶半分 / ナンプラー大さじ4 / レモングラス1本 / ターメリック小さじ1 / A: ニンニク3片・ショウガ1片・チリパウダー・ナンプラー・黒コショウ各少々 / そうめん4束 / ひよこ豆少々 / 卵2個

#### 【作り方】

1. 鍋にお湯(2L)を沸かし、ナンプラー、レモングラス、ターメリックを入れる。
2. フライパンでコメを弱火で熱してからミキサーで粗く挽き、1に加える。
3. タマネギをくし型切りにし、1に入れて15～20分煮る。
4. フライパンに油をひきAを炒め、香りが立ったらサバを加えて水分がなくなるまで煮詰め、1に加える。
5. ゆでたそうめんに1をかけ、ひよこ豆のかきあげとゆで卵を乗せる。



# 民主化を後押ししながら 人々の生活環境の改善を

閉ざされた国々のイメージが強かった  
ミャンマーを取り巻く状況が変わり始めている。  
JICAは同国の民主化を後押しすべく、  
人々の生活向上からインフラ整備まで  
幅広い支援を展開していく。



[上]大型サイクロンの被害軽減のため、予報や警報を発信する運輸省気象水文局職員の能力向上に向け防災アドバイザーを派遣  
[下]マングローブ林の再生に向け、住民グループが苗木を育て植林するなど自主的な森林管理を目指す



教材の改善、実験の導入などを通じて、子どもたちが楽しみながら学ぶ授業を普及

2010年の総選挙により軍事政権が終えんを迎え、民主化への道を歩み始めたミャンマー。地理的条件と豊富な資源から、今後の発展の可能性への期待が高まっている。

ミャンマーは巨大なマーケットである中国とインドに隣接している上、近年目覚ましい経済発展を遂げるタイやベトナムなどの新興国にも近い。これまでメコン地域からインド方面へ貨物を運ぶ場合、マレー半島を迂回しなければならなかったが、今後はミャンマー国内を通れば陸路ですぐにインド洋に抜けられるようになるため、流通の重要な拠点としても有望視されている。

また、天然ガスや石油、金、銅といった豊富な天然資源に加え、6,000万人の人口も同国の発展を後押しする。日本でいう寺子屋のような地域で教育を行うシステムが機能しており、成人識字率は9割以上。海外企業が進出する上で、優秀な労働力として期待されている。

しかし、03年のアウン・サン・スーチー氏の拘束を受けて国際社会からの批判にさらされ、経済制裁も受けた経験を持つ同国。日本もそれ以降、しばらくは緊急性のある人道支援に限定して支援を行っていた。

約14万人もの犠牲者を出した08年のサイクロン「ナルギス」後の対応として、JICAはシェルターにもなる小学校の建設や防風林となるマングローブの植林など、防災力強化のための支援を行ってきた。また、HIV/エイズ、マラリア、結核の三大感染症への対策として、医療施設での保健サービスの向上を目指し、医薬品や機材の整備、保健省などの能力強化を支援。教育分野では、暗記型の詰め込み教育ではなく、グループワークなど参加型授業の普及にも取り組んだ。また、民主化や経済構造改革を担う人材を育成するため、市場経済化、情報技術、税関などの分野で人材育成を行うなど、生活向上や人づくりの支援に力を注いできた。

現在、国の状況は日々変化しており、現地のニーズも変わってきている。これを受けてJICAは民主化のプロセスを見守りつつ、人々の生活に直接影響をもたらす基礎生活分野を引き続き支援していく。例えば、人口の7割が従事する農業の生産性向上や少数民族が多く暮らす地域での農村開発、障害者への福祉サービスの改善など、貧困削減や社会的弱者の生活向上を目指す。

これに加えて、安定的な経済発展に向けた支援も開始する予定だ。例えば、金融制度の改革といった法制度の整備や煩雑な行政手続きの改善と、その新しい制度を運用する人材の育成に取り組んでいく。さらに、海外からの投資促進に向け、基礎インフラの整備も急がれている。そこで、ヤンゴン郊外のティラワ地区を経済特区とし、日本企業の進出も見据えて、円借款を活用しながら港、道路、電力設備などの整備を進めていく計画だ。



[左]ソフトウェアやネットワークを構築する技術者を育成。情報通信業界のレベルアップを目指す  
[右]今後開発が期待されるヤンゴン港の造船所で溶接の技術指導を行う日本人専門家



# イチオシ!

## M OVIE

### 『The Lady ひき裂かれた愛』

軍事政権下のミャンマーで、市民から“The Lady”と呼ばれていた女性がいる。建国の父と呼ばれたアウン・サン将軍の娘、アウン・サン・スーチー氏だ。将軍が暗殺され、民主化運動のリーダーとなった彼女は軍から危険視され、市民が気軽に名を呼べなかったのだ。幾度の自宅軟禁にもかかわらず、不屈の精神で非暴力による民主化運動を貫き、1991年にはノーベル平和賞を受賞。過酷な闘いの中で、彼女が強く、美しく、気高くいられたのは、離れ離れになりながらも強いきずなで結ばれたイギリス人の夫の存在があったから。まさに今、民主化の真ただちにあるミャンマー。この国の“改革”を生み出したスーチー氏の知られざる半生を描く。



Photo Magali Bragard © 2010 EuropaCorp - Left Bank Pictures - France 2 Cinéma

2011年／フランス／133分  
 監督：リュック・ベッソン  
 出演：ミシェル・ヨー、デヴィッド・シューリス、ジョナサン・ラゲットほか  
 公開：7月21日(土)より、東京・角川シネマ有楽町ほかにて全国公開  
 URL：www.theladymovie.jp/  
 配給：角川映画 TEL：03-3514-1556

## E VENT

### 『タイ・ミャンマー・カンボジアフェスタ2012』

日本人の旅行先として根強い人気を誇るタイ、アジアの“最後のフロンティア”として注目を集めているミャンマー、そして世界遺産のアンコールワットで有名なカンボジア。この3つの国の料理や民芸品のブースが代々木公園に大集合!音楽や伝統スポーツなどのイベントも開催される予定。近年目覚ましい発展を遂げ、勢いのあるアジアの雰囲気をたっぷり満喫できるはず。

会期：7月28日(土)、29日(日) 10～20時  
 会場：代々木公園イベント広場・ケヤキ並木(東京)  
 URL：www.bmi-music.com/  
 問い合わせ：B.M.I. Co., Ltd TEL：03-6454-7362

## B OOK

### 『ピア・ボランティア 世界へ ピアとしての障害者の国際協力』

本書の著者は、JICAボランティアとして、モンゴル、シリア、マレーシアなどに派遣された9人の障害当事者たち。彼らは「ピア・ボランティア」として、障害者の社会参加を促すセミナーの開催、スポーツや指圧・鍼灸の指導などを通じて、開発途上国の障害者が直面する課題解決のために活動した。ピアとは「同じ、もしくは似た体験や経験をした人」という意味。障害当事者だからこそ、現地の人々と経験を共有しながら“共に”活動することができる。そんな彼らの挑戦を追った一冊。



この本を  
1人の方に  
プレゼント  
詳細は  
38ページへ

久野研二 編著  
現代書館  
1,680円(税込)

## B OOK

### 『世界から飢餓を終わらせるための 30の方法』

地球上には、すべての人が健康に暮らすために十分な食料があるにもかかわらず、世界の6人に1人は生きるために最低限の食事さえできていない。なぜ飢餓が起こるのか。まずは世界の食の現状や日本人の食生活を見つめ直し、地球上で暮らす約70億人が皆平等に食べられる世界になるよう、一人一人ができることを実践するべきだ。飢餓問題に取り組む国際協力NGOや大学、生活共同組合などの専門家25人がそのヒントを分かりやすく解説している。



この本を  
1人の方に  
プレゼント  
詳細は  
38ページへ

NPO法人ハンガー・フリー・ワールド 編  
合同出版  
1,365円(税込)



「3月号特集リオ+20『The Future We Want 私たちが望む未来』を読んで」

■ごみの分別回収の大切さを、この冊子でつくづく感じた。何気なく...のごみが、分別することで、再生・原料につながることを、もっとみんなに広報しなければならぬ。

(大阪府/女性/61歳)

■どの国もその規模を問わず相互依存しているものだと思えました。グローバル化＝画一化ではなく、各々の国が独自に生活を作り上げていくものでしょう。

(静岡県/男性/60歳)

「4月号特集大洋州と東ティモール『島の未来を考える』を読んで」

■今回の特集はリゾート地などの裏側について知ることができたように感じます。特にフィジーについては、リゾートとしての表の顔しか分からなかったのに、フィジーの違う一面を知ることができて良かったです。

(福島県/女性/29歳)

■東ティモールについて、紛争が起きている遠い国のことだと思っていました。資源のない我が国に天然ガスが送られてくることを初めて知りました。こういった国にこそ、戦略的かつ人道的な支援を我が国が行うべきだと思います。

(大阪府/男性/50歳)

■富永さんの言葉「知ることが大事」に、少しだけホツとした気がしました。何かできることはないか?何かしなくてはいけないのではないかと思いつつ、日々の雑事に追われ、時間ができれば自分勝手なことをして自分の「JICA's World」を読んでいるときだけ、焦り、のようなものを感じていました。地球ギャラリーは、各国の料理も驚きとともに楽しませてもらっています。写真も多く、私のような活字が苦手な人間でも読みやすく、内容が伝わりやすくなっていると思います。

(愛知県/女性/47歳)

本誌へのご意見・ご感想や  
JICAへのご質問を  
お寄せください。

プレゼント  
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2012年8月15日

Email: jica@idj.co.jp  
FAX: 03-3582-5745 (『JICA's World』編集部宛)

- ① ウガンダのビーズ製品
- ② 書籍『ピア・ボランティア 世界へ』(p37参照)
- ③ 書籍『世界から飢餓を終わらせるための30の方法』(p37参照)



①



③



②

本誌をご希望の場合は  
下記方法で  
お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形でご送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払いください。入金の確認後、発送手配をいたします(入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください)。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 業務部(発送代行)  
住所 〒107-0052 東京都港区赤坂2-13-19 多聞堂ビル  
TEL 03-3584-2191  
FAX 03-3582-5745  
Email order@idj.co.jp



次号予告 (2012年8月1日発行予定)

# 水と衛生

人間の生存に必要な不可欠な安全な水と衛生施設(トイレ)へのアクセス。日本の知見を活用したJICAの水と衛生分野の支援を紹介します。





© Yuki Asada

## 丘の向こうで生まれたビーズのアクセサリー

東アフリカの内陸国、ウガンダ。「アフリカの真珠」と称されるほど自然豊かなこの国から、太陽の光のようにまぶしくてカラフルな雑貨が届いた。

生産地はタンザニアとの国境近くに位置するイシンジロ。辺り一面、いくつもの急斜面の丘が連なるこの地域。その景色は息をのむほどの美しさだが、どこに行くにもこの丘を越えなければならない。買い物も水くみも、学校に行くのも一苦勞。まさに「陸の孤島」だ。それでも女性たちはいつも明るくて元気。家事に畑仕事に、懸命に汗を流している。その一方でこの地域ではHIV／エイズのまん延が深刻な問題。シングルマザーも多

く、生活は決して楽とは言えない。

そこで青年海外協力隊員が地元のNGOと協働で取り組んでいるのが、ビーズを使ったアクセサリーの製作。「ウガンダの女性は、手先が器用で技術を習得するのも早い。デザインセンスもある」と関口聖子隊員。売れる商品を作るために品質を意識するようになった結果、売り上げも順調に伸びている。「子どもを学校に行かせられるようになって、うれしい」とみんな笑顔で話す。

色とりどり、キラキラ光るビーズに、彼女たちの笑顔が映し出されてくるよう。ぜひ一つ、夏のファッションアイテムに加えてみては。



一つ一つ、糸に小さなガラスのビーズを丁寧に通していく。子育てと両立して仕事に励んでいる

★ビーズのネックレスとブレスレットを各3人、ボールペンを2人にプレゼント! →詳細は38ページへ







# 私の なんとか しなきゃ!

Vol. 21

## PROFILE

東京都出身。広告代理店勤務を経て、1984年に作詞家としてデビュー。アーティストの楽曲、テレビアニメーションの主題歌などを手掛ける。代表作の一つ、平原綾香のデビュー曲「Jupiter」はミリオンヒットに。作家としても数多くの小説・エッセイを執筆している。「なんとかしなきゃ!プロジェクト」著名人メンバー。

私が作詞した作品の一つに、平原綾香さんの「Jupiter」があります。「ひとりじゃない、みんなつながっている」というテーマの歌です。インドのガンジス川のそばでこの「Jupiter」を聞きたい。そんな直感に背中を押されて、2008年にインドを訪れました。

私にとってのインドは、カー<sup>こんとん</sup>スト制度の名残で貧富の差が激しく、混沌としたイメージでした。人生の中で行くことはないだろうと思っていたのですが…。でもこの時はなぜか、インドに“呼ばれた”気がしたのです。

勇気を出して踏み出した一歩。首都デリーのスラム街も歩き、聖地バラナシのガンジスの河岸では、私をじっと見つめる物乞いの少年に出会いました。思わず目をそらしてしまいそうになったのですが、この現実を知るためにここに来たのだ、ちゃんと見なくてはいけないと、自分に言い聞かせました。彼から物を買うことは簡単です。でもそれは本当に意味があるのだろうか。今でもその答えは出ていません。

感動こそが人の心を動かす

## 吉元 由美

作詞家・作家

YOSHIMOTO Yumi



photo by Shinichi Kuno

インドに行く前からも、貧しい国の人々の助けになりたいという気持ちをずっと抱いていました。私にできることがあればと、日本のNGOを通じてフィリピンの女の子の里親になり、少額ですが毎月寄付をしています。里親になって4年、彼女は高校を卒業し、先日報告の手紙をもらいました。「大学では科学を勉強して、将来は家族を助きたい。私が夢を持てたのはあなたのおかげです。ありがとうございました」。しっかりとした英語で、そう感謝の言葉がつづられていました。

この手紙を中学生の娘に見せると、めったに親に涙を見せない彼女がポロポロと涙をこぼすんです。「お母さんの気持ちが、この子の人生を変えたなんて、よく分からないけど、なんだかすごいと思う」と。この時、娘の“心の扉”が開いたように感じました。たった1通の手紙が持つ力。人の心を揺り動かす“感動”こそ、子どもたちが世界を知りたい、誰かの役に立ちたいと思うきっかけになるのです。その機

会を作り出すのは、私たち大人の役割なのだと思います。

インドでは夜明けのガンジス川を進む船の上で「Jupiter」を聞くことができました。誰もがそれぞれの人生を生きていて、その命はかけがえのない尊いもの。河岸で両手を差し出し喜捨を乞う人々と、私の存在はつながっていることを深く感じました。そう、世界はみんながつながっている。それに一人でも多くの人が気づき、行動を起こせば大きな力になるのでしょうか。国際協力といっても、いろいろなアプローチがあります。大事なものを何をするにも“気持ちを込める”こと。思いを行動にしていこうと思います。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトを中心に、さまざまな国際協力のカタチを提案していきます。[なんとかしなきゃ.jp](http://nankotoshinakya.jp)  
詳しくはこちらから→